

1988年夏江南デルタ小城镇紀行

科学研究費（国際学術研究）大学間（名古屋大学・南京大学）協力研究「江南デルタの中小都市——市鎮——の社会経済構造に関する歴史学的地理学的研究」第1年度調査の記録

森 正 夫

目次

はじめに

- 一. 木瀆鎮
 - 二. 支塘鎮
 - 三. 角直鎮
 - 四. 蘇州大学
 - 五. 長青郷
 - 六. 周荘鎮
 - 七. 黎里鎮
 - 八. 盛沢鎮
 - 九. 嘉定県辦公室
 - 十. 婁塘鎮
 - 十一. 南翔鎮
 - 十二. 黄渡郷 付嘉定県連合棉紡績廠等
- 結びに代えて

はじめに

1988年7月15日から8月15日にかけての32日間、文部省科学研究費補助金（国際学術研究——大学間協力研究）の交付を受け、名古屋大学文学部・教養部所属の5人の研究者と南京大学歴史系・地理系所属の4人の研究者によって「江南デルタの中小都市——市鎮——の社会経済構造に関する歴史学的地理学的研究」（第1年度）が実施された。本稿はこの共同研究の総括作業に資するための記録の一つとして書かれた。

1987年春から約1年の準備を重ねた名古屋大学側の研究者中の4人は、1988年3月21日から4月7日にかけて自費で中国を訪問し、3月22日から25日まで共同研究計画の具体化について

協議を重ねた。同26日から4月2日まで名古屋大学側は同里(江蘇), 唐棲・烏鎮・濮院・王江涇・南潯(浙江)の諸鎮を見学し, 南京大学側は内部での検討を行い, 4月3日から協議を再開し, 同5日, 表記の研究実施についての「共同議定書」を作成し, 名古屋大学側を代表して著者が, 南京大学側を代表して歴史系の羅崙氏が署名した。1988年夏に32日間で江蘇省の四つの鎮を, 89年夏に30日間で上海市の二つの鎮と浙江省の三つの鎮をそれぞれ共同で調査し, その結果についての共同研究を実施するというのが主な内容であった。

その後, 7月初旬にかけて南京大学側は議定書の第四項「分担」の取り決めに従って懸命に「中国の関連行政部門及びその他の部門との連絡・交渉」に当たった。第一年目の調査対象であった江蘇省の各鎮の人民政府からはいずれも基本的に了承が得られたが, 江蘇省人民政府の責任者(「有関領導」)の認可はなかなか得られなかった。別の奨学金で参加した1名を加えて計6名からなる名古屋大学側の研究者は, 7月15日南京を訪問し, 南京大学側の研究者4人との共同の研究会, 図書館・地理系資料室での文献・資料・統計・地図の調査, 調査対象周辺の三つの鎮の参観, 江蘇省社会科学院に在籍する江蘇省小城鎮研究会のメンバーとの学术交流などを実施しながら約10日間待機を続けた。しかしながら, 南京大学歴史系と同外事辦公室の献身的な努力にもかかわらず, 同26日までに原計画自体についての認可はなお下らなかった。

この状況をふまえ, 私たちは, 第1年目に予定した江蘇省の木瀆鎮(呉県), 支塘鎮(常熟市), 黎里鎮・盛里鎮(呉江県)に5-6日ずつ滞在して調査する計画を変更し, 当時の異常高温にも留意しつつ, 蘇州市を拠点に日帰りでこれらの鎮を含む特徴的な諸鎮を訪問してその外観を観察するとともに, 可能なところでは鎮の政府幹部や文化施設の責任者との座談会, 及び鎮の住民とのインタビューを試みることにした。幸いにも江蘇省の少なからぬ鎮で理解ある御接待を受けた(A)。同時に上海市の復旦大学の御斡旋により, 同市嘉定県外事辦公室のお世話で嘉定県嘉定鎮(旧県城)を拠点に同県の由緒ある三つの鎮とその政府を訪問することができた(B)。また, この32日間には, 当初の予定にはなかった諸単位との実質ある学术交流をも進めることができた(C)。以下に訪問した鎮名・単位名を記す。ここでいう鎮には, 行政上も鎮と名乗る建制鎮(県属鎮)のほか, 行政上は郷であるものが含まれる。また, (D)としたのは, 南京での待機中に名古屋大学側のメンバーが臨時に訪問した鎮である。鎮名に付した()内は市・県名と訪問の日付を示す数字であり, 7.29は7月29日の略である。

(A) 木瀆鎮(呉県。7.29), 支塘鎮(常熟市。7.31), 角直鎮(呉県。8.1), 長青郷(蘇州市。8.2), 周莊鎮(崑山県。8.4), 黎里鎮(呉江県。8.5), 盛沢鎮(呉江県。8.6)

(B) 婁塘鎮(8.9。嘉定県), 南翔鎮(8.10。嘉定県), 黄渡郷(8.11。嘉定県)

(C) 江蘇省社会科学院・江蘇省小城鎮研究会(南京市。7.22), 蘇州大学歴史系・図書館(蘇州市。8.2), 嘉定県人民政府外事辦公室(嘉定県嘉定鎮。8.9), 嘉定県志編纂委員会(嘉定県嘉定鎮。8.11), 上海社会科学院歴史研究所(上海市。8.12), 上海社会科学院経済研究所(上海市。8.13)

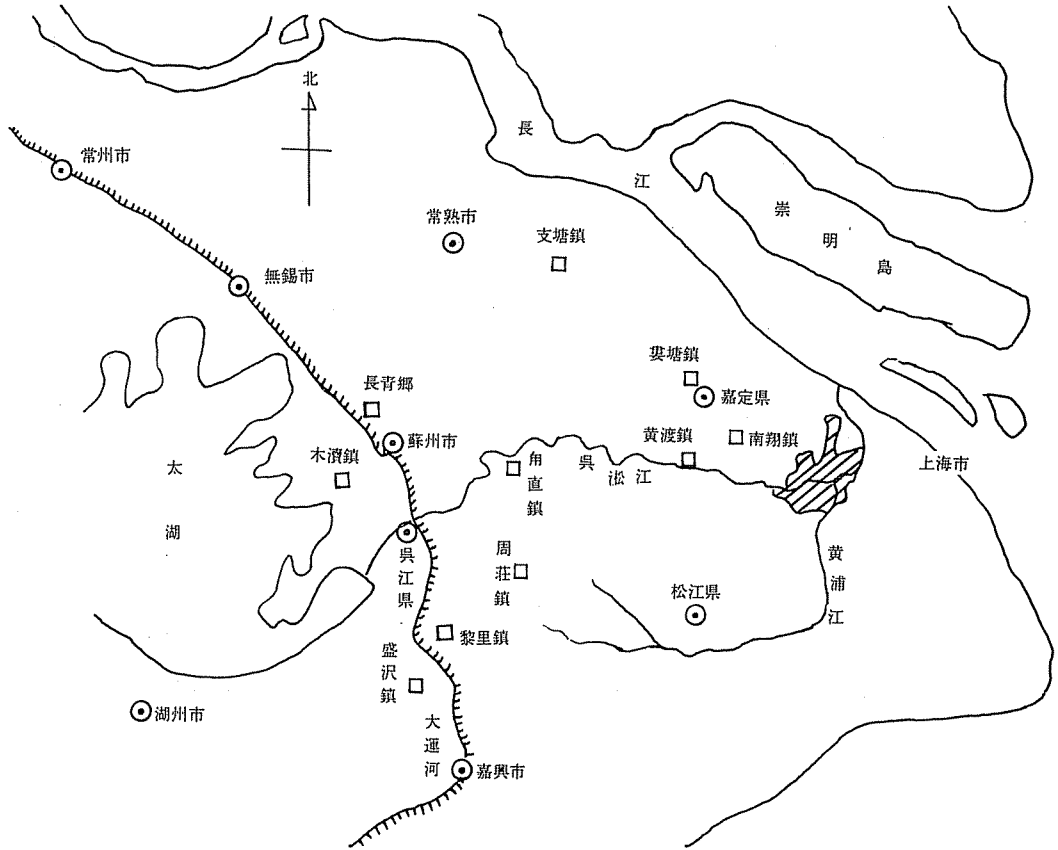
(D) 大橋鎮 (江都県。7.17), 茅山鎮 (句容県。7.20), 宜城鎮・丁蜀鎮 (宜興県。7.22)。

先述のように、88年夏のこの第1年目の活動においては、江蘇省の一責任者の許可が遅れたため、各鎮につき5-6日間の立ち入った調査は不可能となり、各メンバーがそれぞれの関心に即して用意していた調査項目に基づく聞き取りや資料・統計の検索はいずれも困難となった。私たちの苦悩と失望は大きかった。しかしながら、上記のように、7月27日以来の新しく編成しなおした調査活動は、以後3週間足らずの間に今日の江南デルタの小城鎮の現状とその直面している問題とについての多くの知見を私たちに与えた。私たちは、各人の問題関心に基づき、新たに収集した文献の研究を進め、また期日を延期して実施した第2年目、すなわち、1989年度の調査と結合することによって、こうした第1年目の活動の成果を活用することを期している。現に名古屋大学側の研究者により4つの作業が、南京大学の研究者の側で5つの作業がそれぞれ行われている⁽¹⁾。

第1年目の活動は、ここまで記してきたとおり、個別の項目や課題の研究についての十分なデータを提供するというよりも、一日一日と積み重ねたその全体を通じて研究上の手掛かりを獲得するという性格をもつ。本稿はこの点を考慮して敢えて草された活動の記録であり、かつ名古屋大学側研究者の問題関心とそれに基づく発言・観察をまとめたものである。記録として意味をもつことから、(A)及び(B)に対応する第1部と、(C)に対応する第2部とを区別し、とりあえず、第1部のすべてと(C)の一部とについて、目次に示したように、活動日程順に記述した。研究の分析視角を練る上で示唆的な後者は別の形で公表する予定である。(D)については、筆者が事務折衝に従事して参加不能であったため省略する。

ちなみに、名古屋大学側の研究者6人の所属と個別研究課題は下記の通りである。

森 正夫	文学部東洋史学研究室	研究の総括。鎮の行政と住民関与。鎮の景観・町並・文化財。鎮の文化的施設。歴代の郷鎮志。
津田芳郎	教養部歴史学研究室 (現北海道大学文学部)	鎮の行政・経済活動と鎮農村部における農家経営・土地所有のありかた。
海津正倫	文学部地理学研究室	江南デルタ全体の自然地理学的環境及び当該環境と鎮の立地条件との関係。
林 上	教養部地理学研究室	鎮の人口・交通・工業・商業及びこれらを基盤とする集落システム。
稲田清一	文学部東洋史学研究室	鎮と商業・市場との関係。鎮を中心とする地域社会の構造。
石原 潤	文学部地理学研究室	鎮における市集 (market) の役割。(石原は加藤龍太郎基金による参加)。



本文言及の江南デルタ小城鎮略図

一. 木瀆鎮 (7月22日)

午前8時過ぎマイクロバスで蘇州市南林飯店を出発。1983年、筆者が一人で郊外バスに乗り、木瀆鎮経由で太湖公社を訪問したときに比べて蘇州—木瀆間の公路が大変よく整備されているのに驚く。1930年代以来の公路を1985年にコンクリート舗装したという。蘇州博物館考古部の丁金龍氏、吳県文物管理委員会の姚勤徳氏が随行して下さる。午前9時ごろから木瀆鎮人民政府の庁舎で同政府との木瀆鎮についての懇談を行う。木瀆鎮を代表して応答いただいた主なスタッフは、副鎮長の顧叙根氏と村鎮建設助理の田嘉禾氏であった。顧氏は、10年間人民解放軍に在籍したのち、蘇州市に配置換になり、さらに郷里の木瀆鎮に戻ったという。ややはにかみながらも、かざりけなく、明快かつ丁寧に話して下さる。田氏も誠実、明敏の感がある。

木瀆鎮について副鎮長は、メモに基づいて詳細な説明をされた。まず、鎮の概況・沿革が紹

介された。1985年10月に成立した現在の鎮は、それまでの木瀆鎮と金山郷とが合併してできた。面積は36,400平方キロ、人口は52,200人、そのうち市街地人口は18,900人である。蘇州市から12キロ、無錫までは50キロ、周囲は山に囲まれており、年間の降雨量が1092ミリ、平均気温18.9度、最高気温が38.8度である。

続いて歴史について詳細な言及があった。ここには5千年前から人々が生活を営んでいた、という。南方に審洞山があり、太湖が氾濫したとき、避難した人々がここに集落を作ったのである。殷の終わりのことであった。春秋の呉・越両国が覇を唱えた時代、呉王夫差が今の蘇州市に姑蘇城を建設すると、その領域に組みこまれた。呉越戦争の際、越王勾踐は呉王夫差に敗れたが、臥薪嘗胆、国家の再建に努め、美女の西施を呉王に贈って彼の闘志を弛め、同時に越国から大量の木材を輸送し、腕のいい大工とともに呉王に献納した。呉王は靈巖山に西施の居所（「館娃宮」）を作ろうとした。越から「瀆」に太湖経由で送られてくるこれらの木材の多さは「木、積むこと三年、木、瀆を塞ぐ」とされるほどであった。「瀆」とは「河浜（かわ）」の意味である。これが木瀆の名の由来である。顧氏はこの話に続けて、以後秦の始皇帝、前漢のある太守、西晋の詩人陸機、唐の陸龜蒙、北宋の梁世忠・范仲淹、明の祝枝山・唐伯虎・文徵明、清の康熙帝・乾隆帝、国民党の嚴家淦・李根元などの人物をめぐる故事について詳しく言及された。⁽¹²⁾氏はまた、こうした長い歴史の中で10の有名な風景区（十景）が形成され、保存されてきたが、1958年の大規模な工業化の中でその多くが破壊され、現在は必ずしも良好に維持されていない、と付け加えた。

続いて現在の木瀆鎮の経済状況の紹介が、まず工業について行なわれた。現在、木瀆鎮には鎮に所属する工場（「鎮属廠」）が143、呉県に所属する工場（「県属廠」）が21有り、ほかに市街地行政に所属する単位（「市政単位」）が43ある。1978年に鎮の工業・農業・副業（「三業」）の生産高は1,802万元、そのうち工業生産高は1,017万元であったが、1987年には工業・農業・副業の生産高が2億6000万元、そのうち工業生産高は2億4000万元を占めた。これはすべて鎮所属の143の企業（工場）によって創り出されたものである。今、鎮所属の企業で働く労働者は1万6千余人である。1987年には、もし呉県所属の企業の分を付け加えるならば、工業生産高は合計5億余元になる。

さらに以下の紹介がなされた。鎮所有の土地は24,400畝、1人あたり0.8畝である。市街地では、中学が3校、生徒1,704人、教員が120人、うち木瀆中学は省の重点校であり、呉県全県から生徒を募集する。小学校が1ヶ所、生徒1,752人、教師が174人。そのほかに農村部に小学校、中学校がある。幼稚園は1ヶ所で園児は212人、教師が12人、教師進習学校が1つあり220人の生徒、27人の教師がいる。614平方メートル、10万冊の蔵書をもつ図書館、観覧席1,477の映画館、1,580の体育館がある。医療施設では、87年に鎮市街地の三叉路に新設された鎮営の病院があり、ベッド数180、医師・看護婦100余人が勤務している。また180ベッド、140人の県属病院がある。前者には120余万元が投資された。水道としては、従来から浄水場（「水廠」）

が一つあり、日に4千トン进行处理していたが、解放初期に3千人だった人口が増加するにともなって、水道使用量が増加し、第二浄水場の建設を本年から開始した。第1期工事完了の段階で5千トン、新旧あわせて9千トンを供給している。将来は新浄水場だけで日に1万5千トンを供給する。太湖の岸の取水口から取水している。鎮市街地の住宅は、1987年8月で174,400平方メートル、1人当たり8.6平方メートルである。

ここで木瀆鎮の工業生産について改めて詳細な説明がなされた。数年来、この鎮では工業の各分野が、生産の発展の中で、かなり整ってきた。県所属の工場には、鉄鋼、農薬、発動機などの規模の大きいものがあり、鎮所属の主要なものには建築材料がある。この一帯の花崗岩を加工する技術の水準は高く、日本、アメリカの商人が買い付けにくる。

最近呉県では輸出型経済を非常に重視し、対外開放政策を実施し、外国の資本家の投資による企業経営を歓迎している。また外国の先進設備を導入している。たとえば、ある村営工場では西独・オーストリアからエナメル線の生産ラインを導入し、昨年の生産額は2,200余万元に達した。鎮には医療器具産業が発展しており、主要な設備を外国から導入して、点滴注射用セット、輸血パック、手袋など使い捨ての医療器具を生産し、主として輸出している。

その他の大規模なものとしては、プラスチック成型工場があり、蘇州市の香雪ブランドの電気冷蔵庫工場、電気掃除機工場、上海市の水仙ブランドの洗濯機工場の部品を供給している。最近この工場ではイタリアから設備を導入し、輸出している。

外国と関係を結ぶほか、「航天部（航空宇宙局）貴州基地辦事処」と提携を行い、当地で工場を経営している。当面の協定書には10余の工場が記載されている。このうち規模の大きいものとしては、蓄電池工場がある。提携は、「航天部」が技術と設備を提供し、木瀆鎮が土地、基本設備、労働力を提供する方式をとる。蓄電池工場の生産は、人工衛生に使用される太陽電池、電気車（電池を動力とする工場運搬用車両。原音は「電瓶車」）用の電池等である。「航天部」の電池生産技術は、国内では、質量ともに先進的であり、目下、西独から電池生産の生産ラインの導入を準備している。プラスチック成型工場、ラジオ工場、その他の新工場も経営している。鎮はまた「山西電辦局」と発電所を経営しており、三セットの機械設備によって9,000キロワットアワーを発電している。

経済の発展にともない1人当たりの収入はここ10年間に増大した。87年は1,200元であった。また鎮における个体戸は1,000戸近くに達している。市街地における都市建設（「市政建設」）の規模がここ数年拡大し、人口が増加し、各種の付帯設備の設置がみなそれに並行したため、経済建設の発展の良好な基礎作りができた。ここ三年来、鎮政府が行った市街地における都市建設の投資額は400万元。86年110万元、87年に140万元、88年の計画ではそのうち水道施設に100万元を投資する予定である。〔農村部分の〕中学が大変小さかったので、87・88両年度に220万元を投じて中学1校を新設する。市街地・農村部分の〔舗装〕道路の延長は35キロであり、今では基本的にどの村でも自動車で行ける。緑化も重視しており、最近5年来に74万株の木を

植えた。鎮の市街地の通りには広玉蘭と香樟樹を植え、農村に通じる道路の両側にはみな広玉蘭を植えている。この二年間緑化投資をしており、鎮政府だけで8乃至9万元の投資をしている。いくつかの単位が自分たちで植樹している分はまた別である。

説明終了後、私たちの側から長時間にわたり多面的に質問を行った。その中でいくつかの注目すべき論点があった。

〔鎮の市街地部分と農村部分とはどのように区分されているのかという問題〕 結論的には所有制の違いによって区分されている。全人民所有制に属している土地は市街地であり、集団所有制に属している土地は農村部である、という。また、工場を建設する必要があるときには、鎮政府が農民の〔集団所有制に属している〕土地を買上げる。そうすると、土地所有の性質も変わるから区域の性質も農村部から市街地に変わる、という。

〔鎮の市街地部分と周辺地区との人口構成〕 非農業人口と農業人口との区分と重なる。木瀆鎮では非農業人口が18,589人、農業人口は16,000人で、そのうち50%は、農業に従事する以外の時間には工場で労働する。農業人口は婦人・子供も入れると30,000人になるという（この数をもってしても前記の鎮の総人口52,000人との間にはギャップがある）。注目すべき点は、この木瀆鎮の人口の増加が、外部からの移入に主としてよっている点である。外部とは三方面である。第1は、蘇北（江蘇省北部）、第2は近隣の市鎮（小城镇）、第3は木瀆鎮内の「航天部」（中国の航空宇宙局にあたる）の人員の一定部分である。木瀆鎮自体の人口の自然増は1000分の6であるという。

〔鎮の都市計画〕 1988年4月1日、私たち名古屋大学のグループが予備調査の一環として浙江湖州市の南潯鎮を訪問したとき、図・表・文書からなる詳細な都市計画について説明を受けており、同種のものが県属鎮レベルの各小城镇には存在するものとみなされる。木瀆鎮では、その成立過程についての説明があった。木瀆鎮では、1983年に作業を開始し、同年、呉県人民政府に申請し、呉県人民政府と共同して「総体發展計劃」（都市計画）を作成した。84年9月に蘇州市から専門家を招いて検討し、85年5月には、この「総体發展計劃」が〔呉県人民政府の一級上の〕蘇州市人民政府で正式に批准された。しかし、この「総体發展計劃」はその後の現実の經濟發展に追いついていない、という問題がある、という。

11時10分頃から鎮の街路に出る。人民政府の正門とその向かい側の農貿市場、すなわち「木瀆市場」との間の大通りは「現代化」が著しい。1983年に筆者が垣間見たこの鎮の雰囲気とは大いに異なる。真新しい「木瀆市場」は広くて明るい。色鮮やかな絵を板面一杯に書いた「新鮮肉類」、「応時蔬菜」の看板や豚肉品質鑑定方法についての巨大な掲示板に新興の気概がみなぎる。この大通りに面して巨大な体育館と、映画・演劇の殿堂「木瀆影劇院」がある。新しい様相を備えたこうした大通り一帯とは異なり、東街、西街、山塘街からなる老街のたたずまいは、『民国木瀆県志』の地図と全く変わらない。ただし、郡廟はもうなくなっていた。参観をしながら、顧氏らに質問したところでは、「総体〔發展〕計劃」によると、東街・西街の北面

には新しい建物を作り、山塘街はそのまま保存する予定だという。また鎮の人民は「総体企劃」に対して意見を反映できるという。意見反映の経路(渠道)は次の三つである。第一は各企業の人民代表が一年に2回開かれる鎮人民代表大会を通じて、第二は各地区の人民代表が同じく鎮人民代表大会を通じて、また居民委員会を通じて日常的に、それぞれ鎮人民政府に意見を伝える事ができるという。ちなみに居民委員会の機能は、「衛生」、「治安」、「上意下達」(下意上達も含意されている)である。また、[人民代表による]鎮長、副鎮長の選挙は3年に1回であり、55才の定年までは留任を認めるという。



木瀆鎮市街地の鎮営縫製工場

いろいろと雑談を交わしながら昼食を終え、再び街頭に出る。茶や熱湯のみを提供する茶館は、現在の木瀆鎮にはない。二、三年前まであったのだが、経営不振で閉鎖したという。それとは対照的に、山塘街の奥まった一角にある茶館を兼ねた書場、「梅苑茶館書場」は非常な盛況であった。立派な一枚板に緑色の文字で書かれた横書きの看板にも意気を感じられる。「老板」(経営者)の婦人に聞くと、彼女自身、もと「評劇団」の一員であり、今年4月、150元の「税」を納入してこの書場を開設し、目下月200-300元の収入があるという。演者は、昨年蘇州の「評劇団」を退職した人で、1回2時間ぐらい連続して語る。ピンク地の紙に墨で書かれた「海报」(ポスター)には、「蘇州市評談隊 呂紫霞 弾唱 後白蛇伝 七月廿七日開書」とある。場内は年配の男性客で満員であった。熱いお茶を御馳走になってひとときを場内で過ごした。出入口のガラスケースには販売用の蒸溜酒の瓶が置いてあった。

午後3時頃、この鎮の主要工場の一つである扇風機製造工場を訪問した。「江蘇省呉興防爆

電機廠」が正式名称である。「嚮応廠党委号召 戰高温 奮高温 重質量 以實際行動支援高温地区人民」。今年の猛暑に直面している人民を支援するために奮励して生産しようという黒板の掲示が目立つ。副工場長、すなわち呉県防爆電機廠付廠長徐坤泉氏は、長時間のインタビューに応じて下さった。テープに収録した同氏との問答のポイントはいくつかあったが、部品を周辺の農村の下請け工場から調達していること、前年にたとえば陝西省の西安を含む全国の大都市において商談をして注文をとり、その数だけ生産するという計画生産であり、猛暑による注文増に臨機に対処することもなかなか難しいことの二つが印象に残っている。堂々たる大工場であるが、日本での工場見学の経験を豊富にもつ地理学のメンバーは、扇風機の部品を一つ一つはんだごてで接合する男女の青年工員たちのおしゃべりや、作業対象である扇風機の半製品のほうりなげ、部品が着かないため、ある一つの生産ライン全体が待機状態にある点などをとらえ、その非効率性に対して厳しい評価を下していた。このあと、できたばかりという「郷鎮企業」の縫製工場を見た。15人の青年男女がミシン縫いとアイロンかけに黙々と従事していた。ミシンも15台ほどあった。午後4時半頃、昼食後、地形観察を兼ねて洞庭東山の紫金庵の見学にいていたグループと木瀆鎮市街地の参観を行ったグループが人民政府の門前で合流し、蘇州市に帰った。

二. 支塘鎮 (7月31日)

朝、8時半、マイクロバスで南林飯店を出て、北進し、支塘鎮の参観に赴く。蘇州市から常熟市へ行く公路は、1983年当時に比べて改良されているが、蠡口鎮を過ぎるあたりから橋梁・電線などを主とする工事が多く、従って渋滞箇所も増え、結局支塘鎮に到着したのは午前11時すぎであった。11時30分頃、鎮中心部の食堂「支塘飯店」に入る。比較的清潔で味もよかった。この鎮は白茆塘と塩鉄塘が交錯する交通の要衝に位置する。だが、塩鉄塘は意外に狭く、町並みの外貌も平凡であり、まさに田舎町といった感じが強い。しかし、これこそ江南デルタの典型的な鎮の姿である。「新華書店」も古い二階建の商家の一つに置かれている。「高東茶水店」は、こうした在来の鎮の雰囲気伝える象徴的存在である。木製の方形のテーブルを囲みながら半裸からブルーの長袖に至るまでさまざまの様子の男性客約40人が茶を飲み、煙草をすいながらいこっていた。農民の雰囲気をもつ人が多い。父と娘とで天びん棒を製造し、各種の大きい分銅秤とともに販売する店。バケツや麦藁帽の目立つ「支塘鎮供銷合作社日用雜品部」。国营で、「竹木」つまり文字通りの竹材や杉、松、ラワンなどをはじめとする材木を主に扱っている「支塘生資部」に立ち寄り、店員に話を聞く。アフリカ、東南アジア、ソ連など国外からの輸入品50%、国内産のもの50%、農民の家屋建築に充てられるものが多いという。目を奪われたのは白茆塘の船着場をびっしりと埋めていた老婦人たち百人余りの大集団である。尋ねてみると、これから常州のお寺にお参りにいくのだという。生き生きとした楽しそうな表情であっ

た。

支塘鎮をあとにして、周辺の土地の高低や作物分布を見るために西北に流れて長江に注ぎ込む塩鉄塘に沿って公路を走る。梅李鎮で塩鉄塘沿いのこの公路から離れ、右折、つまり北北西に進路をとって長江南岸の澣浦鎮まで車を走らせる。澣浦鎮から見た長江の驚くべき広さに改めて感銘を受ける。支塘鎮から梅李鎮にかけての塩鉄塘周辺はみな棉畑であった。午後5時頃蘇州市に帰った。

三. 角直鎮（8月1日）

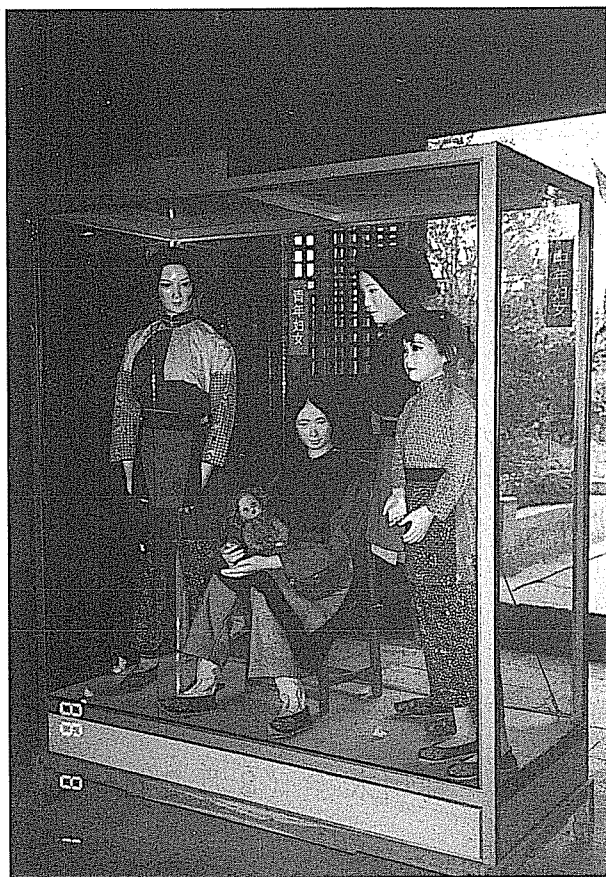
午後1時に約束したバスが来ず、40分遅れて宿舎を出発し、蘇州市を東方へと向かい、呉県の東端にあり崑山県の西端と接する角直鎮に向かう。路は金鷄湖、独墅湖の間を通り、呉淞江の南岸を東へ進み、澄湖へと通じるクリークの間を抜けて東へ向かう。水郷地帯の美しいたたずまいが続く。この間、自然地理学の海津正倫氏の要請もあり、三度、四度と車を止める。同氏はこの間、氏の構想する江南デルタ沖積平野形成の二類型を示す地形上の特徴を見出したと話される。金鷄湖の畔で出会った小学校上級くらいの年齢の男の子が自分たちの家は「養蚌（からすがい）的」と自分の手のひらに書いてくれる。貝類の養殖場が広く設けられている。この湖からさらに東へ行った一帯で道の左手に古いスタイルの家がある。平屋、白壁、両端をわずかに反り上らせて棟飾りをつけた屋根の背骨、主屋二棟と側屋からなる。私たちは解放前の地主の家かと思ったが、タクシーの運転手はせいぜい1966年から70年の文革前期のものだという。ここから角直の境域に入ることを示す道標のあるコンクリート橋から見た南北に連なるクリークは、数多くのそれに見慣れている私たちにとっても水の豊かさ、江南独特の堤防のない低い岸辺から水田に広がる緑とでたとえようもないほど美しかった。橋の下を低い吃水の船を十数隻連ねた船団が行き交う。鎮市街地の手前2-3キロのところで粗いめのアスファルトを公路に敷き、その上に人力で砂利をまく工事が続き、車が動かないため歩いて鎮に入る。鎮の市街地にさしかかる前の公路の左右に呉県の名を冠した工場が続く。

鎮の市街地に入る。小さくまとまった古鎮である。老街が入り組み、クリークにかかる橋はまるでミニチュアのようなようだ。

この古鎮を代表する存在である保聖寺を訪問する。一息入れてビール壺のような大きな容器に入った炭酸水（「汽水」）を飲み、十二支をかたどったメタルを買い求めたりしているうちに、呉県保聖寺文物保管所所長の王新氏が私たちのところに挨拶に見え、情熱をこめて懇切な説明と案内をして下さった。

同氏によれば、かつて1919年、新文化運動が展開されていた当時、この角直鎮に岳母が住んでいた関係から保聖寺の羅漢像の存在を知っていた北京の一中国人学者が、この羅漢を東京美術学校教授の大村西崖（1868-1927）に紹介した。その後、大村はこの羅漢についての考証・

研究を進め、その成果を体系的にまとめて普及した。保聖寺の羅漢群像は、私たちが、中国の他の寺院で見るそれとは異なり、あのぎらぎらした彩色が剥落していることが、北宋の作といわれるこの群像の一種の気品を感じさせる。



角直鎮保聖寺境内の呉東水郷民俗博物館

王新氏は続いて羅漢群像のある本堂の手前にある堂宇の一つ建物へ私たちをいざなって下さったが、そこには私たちが予想もしなかった見事な展示があった。同氏がその正式の設立を準備しておられる呉東水郷民俗博物館の一角を構成することになるいくつかの展示がすでにでき上がっていたのである。呉東とは、明清時代の蘇州府の東部・松江府の東部からなる一帯である。解放前に大学で中国文学を専攻された同氏は、はやくから郷里のこの一帯の民俗に関心を抱いて資料の収集や研究を進めて来られたが、この展示はその成果の一端であり、中心になっているのは、明清時代から解放前までの当地方の婦女子の服装・髪型をはじめとする風習である。ガラスケースに展示されている四体の婦人の立像はみな清潔感にあふれ、若い娘さんと中年婦人とに分けておくれ毛の細部にいたるまで丁寧仕上げられている。説明の仕方も周到で、

全体として堅実な研究の裏付けが感じられる。その服装・髪型の分布状況を示す「呉東水郷婦女服飾分布示意図」。黒髪を大きく束ねてまげを作り、沢山の飾りを付け、頭巾を被るという呉東水郷の婦人たちの髪型の特徴とその髪のかい方についてのカラフルでわかりやすい説明板。現在の髪型の風習についての“勝浦村”におけるサンプリング調査を表にまとめたもの。これらが目にとまる。王新氏は江蘇省民俗学会の会員でもあるとのことであった。

保聖寺の境内は広い。ここには晩唐の詩人でもあり、農書の一つ『耒耜經』を著した陸龜蒙の墓があり、彼があひるを飼っていたと称される池もある。陸龜蒙の墓にいく手前にある広い旧式の建物には、五四運動に先立つ二年前から開始された新文学運動の初期の担い手の一人であった呉県の人、葉紹鈞（聖陶）とその仲間が、蘇州中学を卒業後、この角直鎮の小学（小学校）の教師となり、昼は教え、夜は勉強した場所である。明代のものと思える大銀杏もある。ちなみに、境内の建物には明清時代のものが多い。王新氏は在来の建築物の修理、先の民俗博物館の正式発足を含め、この広大な境内を活用した文化施設の整備についての壮大な計画を話された。

王新氏はさらに、寺の門外の民家群へと案内の歩みを進める。その民家群は、解放前は寺の附属の建物であった。私たちは、そのうち、道路を挟んで寺門とは反対側にある一軒で、清代末期に建てられた家の内部に入り、中庭まで進む。その家を辞して再び道路に戻り、この保聖寺とその附属施設としてのこれらの民家群が日中戦争の際、日本軍に占拠されたことを王新氏から聞く。同氏が紹介して下さった68歳の一人の老人はこのとき軍隊に食事を運び、将校の部屋には毎日点心（軽食）を届けたという。またお寺とその周辺は日本軍により立ち入り禁止にされ、住民は外に追放されたという。

四. 蘇州大学（8月2日）

午前中、蘇州大学歴史系の王翔先生の案内で蘇州大学図書館を訪問する。蘇州大学のキャンパスはその前身の東呉大学時代からの赤煉瓦の瀟洒な建築群と豊かな樹木が美しい。図書館にはとくに珍しいものはないが、江蘇省統計局編の『江蘇省経済統計』、江蘇省社会科学院図書館編の『小城镇專題資料索引』（1984）、各市県別の『地名録』など、日本には紹介されていない一連の文献が注目された。⁽³⁾

このうち『小城镇專題資料索引』は、1984年度（1月-12月）に刊行された新聞・雑誌中の小城镇に関する記事・論文のタイトルを、次の13項目に分類・整理したものである。

1. 党と国家の指導者の指示と談話、
2. 政策、
3. 小城镇研究総論、
4. 沿革と都市計画、
5. 労働力、
6. 資金、
7. 商品流通、
8. 各種の事業と関連問題の同時解決、
9. 知的開発、
10. 経済の多面的発展、
11. 改革、
12. 文化建設、
13. 各鎮紹介。

この資料索引は、わずか1984年という一年間についてのものであるが、小城镇問題への関心

が、私の予想を上回る広い範囲において見られ、集中的な検討が加えられたことを示している。近年、私たちに小城镇への注意を改めて喚起させた費孝通の論文「小城镇 大問題」の原型は、周知のように1983年9月21日、南京の「江蘇省小城镇研究会」で同氏が行った発言にある。また、費孝通の指導の下で、江蘇省小城镇研究会課題組が、その論文集の第一として『小城镇 大問題』を江蘇人民出版社から刊行したのが、1984年6月のことであった。江蘇省経済研究室主任・江蘇省小城镇研究会総幹事の朱通華も、後に触れる同人の1985年の一文「江蘇的小城镇建設与小城镇研究」の中で、「1984年は江蘇省における小城镇建設与小城镇研究とが大きな進展をみせた一年であった」と述べている。

ちなみに、江蘇省小城镇研究会課題組は江蘇省社会科学院と緊密な関係をもつものごとくである。すなわち、同課題組を代表して『小城镇 大問題』の具体的な編集活動に従事した呉大声、居福田の両氏は、いずれも江蘇省社会科学院の副研究員であり、7月22日南京大学で開いた同社会科学院と私たちとの懇談会の際に積極的に発言された。また、江蘇省小城镇研究会課題組によって小城镇問題についての学問的総括文書というべき「江蘇小城镇建設的社會目標和基本經驗——江蘇小城镇研究綜合報告」（『社会学研究』1986年第4期）が執筆されているが、この論文は、右の懇談会の席上、江蘇省社会科学院の側から「われわれの総括」として名古屋大学のグループに贈呈された。先の『專題索引』が同社会科学院図書室の編になることとあわせて特記しておく。

さて蘇州大学では、小城镇研究について、これも日本ではまだ見る事のなかった文献に接することができた。王翔氏から森に贈っていただいた、黄維岳・王柏森・龐殿勛・李承邨編『小城镇建設探討』（人民日報出版社）である。1984年2月から同年末にかけて、『新華日報』理論面に設けられた《小城镇建設探討》というコラムに、合計45号にわたり、140余篇の文章が掲載された。目的は、「小城镇を立派に建設するための理論的知識と実践的経験を系統的に紹介すること」にあった。この連載コラムを補訂して出版されたのが本書である。本書は全体の紙副の約4割を割いて小城镇に関する費孝通の5篇の論文を掲載するが、この5篇を含む〈論文集〉、提言からなる〈我見集〉、Q & Aにあたる〈問答篇〉、江蘇を中心とする50の小城镇を紹介する〈名鎮録〉、やはり江蘇を中心とする37の小城镇の名産を紹介する〈一鎮一品〉、及び付録の二篇の文章からなる。費孝通論文以外のものは何れも短文であるが、それ故に論点は明確であり、多方面にわたる指摘を通じてこの時点での問題の所在が明らかになる。前出の朱通華論文は本書の付録二篇中の一つである。

各市・県別の『地名録』は、留学生などによりその存在がある程度は知られていたが、内部発行であり、日本に紹介されてはいなかったため、その詳細は不明であった。今回改めてその一部分を閲覧することができたが、内容には非常に興味深いものがある。たとえば、常州市地名録委員会編『江蘇省常州市地名録』（1983年）所収の「紅梅公社生産大隊自然村名称」の項は、

各生産大隊（行政村）の下の自然村ごとに、村名の拼音、人口、備注の三つの欄が設けられている。このうち、人口は当該の自然村の規模を知る上で重要であるが、さらに注目されるのは、備注である。たとえば、衛星大隊所属、人口226人の張家村の備注には、「清の咸豊間、安徽の張姓難を逃れ、此に來りて居を定む。故に名づく。」とあり、東風大隊所属、人口409人の周莊村の備注には、「明末、江陰の周莊に三兄弟有り、此に來りて居を定む。其の原籍を以て名を取る」とある。自然村の形成過程に関するこれらの情報は、根拠の再確認と統計処理などを加えることによって、さらに重要な資料となるであろう。ここでは、たまたまごく短時間で農村部の自然村について抄写したにとどまるが、小城鎮の市街地部分についても、この『地名録』シリーズは多くの重要な情報を提供すると思われる。

蘇州大学の図書館には、他にも、江蘇省師範学院歴史系蘇州地方史研究室編『蘇州地方史研究論文資料目録索引 1901-1981』なる油印本があった。全174頁、付録1-22頁である。このような地方史研究の文献・資料は各地で作成されていると予測されるが、その検索も小城鎮研究に必要な基礎作業であろう。

五. 長青郷（8月2日）

午後、蘇州市東北郊の長青郷を訪問する。東はかの虎丘の山麓、南は呉県の楓橋鎮、北は呉県の黄橋郷に接し、その西部を滬寧鉄道と蘇州・滄閔鎮間の公路とが東南から西北の方向に貫き、蘇州西駅がその境域内にある。行政上は蘇州市に属するこの郷は、1961年から80年までは長青人民公社であり、蘇州市を訪問する外国人の見学の対象となることも多かった。1980年4月初めには、森も当時北海道大学文学部に属していた現大阪大学文学部の濱島敦俊、日本大学経済学部の小島淑男両氏とともに、旧来の圩田のある低湿地帯を参観したいと申し出て、この公社で半日の見学を行った。ちなみに現在では圩田は養魚池に変わるか或は廃止されるかしている。長青郷人民政府の置かれた長青鎮は、江南デルタの大都市の近郊にある小城鎮の一典型である。人民政府辦公室助理の李永根氏は当方の要請に応じた内容をもつ概況説明をされた後、丁寧に質問に答えていただいた。私たちの質問の重点の一つは人口16,323人、耕地面積10,454畝、1人当たり0.64畝という、過密状態にあるこの鎮の農家経営の現状に置かれた。

農家1戸あたりの経営面積には不均等がある。すなわち14の〔行政〕村ごとにその管下の耕地の面積にも人口にも相違があるからである。〔行政〕村によって、人口と土地とが均衡している場合のみでなく、人口が少なく土地が多い場合、人口が多く土地が少ない場合もある。また、各農家の労働力に応じて耕地を割り当てる方式も採用されている。この場合には、1人当たりの基準面積に加えて労働力にみあった請負地を支給するという形をとる。工業に従事する農民が増大しているが、こうした農民もほとんどみな戸籍分類においては農業戸籍（「農村戸口」）である。かりに1戸に3人の労働力があるとすると、この3人に対しては、工業従事に

関わりなく土地が分配される。農民は自分から土地が不要であるとはいえない。

しかしながら、いったん分配された土地の賃貸借は認められている。その際、農業税は土地を借りて使用した人が負担する。

ほとんどの農家では、1戸の全員が農業戸籍に属し、1戸につき2乃至3畝の土地が配分され、全員で農作業に従事する。農作物の栽培には季節的な変動があり、郷と村にある工場で働いている農民も、農繁期には工場が一時休業するので、農作業に従事し、ふたたび工場に戻る。

蘇州市の自由市場（「農貿市場」）に販売に行くのは、郷を構成する14の村の農民のすべてではなく、蘇州市に隣接する二つの村の農民である。政府がその二つの村には野菜を栽培させており、彼らが自由市場にもいく。

蘇州市の自由市場で花を販売している農民は、工業には従事することなく、穀物や野菜の栽培も行わず、花を専門に栽培している農家である。ジャスミン、白蘭、Tailiuhuaなどを栽培している。

栽培する農作物の内容の相違が多様化し、穀物生産の比重が相対的に低くなっている現状の下で、本来は穀物の現物で納入していた農業税の形態にも変化が生じている。そのため、1982年頃から、農業税を現金で納入することが認められるようになった。納入形態は現金でも穀物でもよく、その農家の意向に従っている。なお、野菜栽培を義務付けられている蘇州市隣接の二村では米を作ることができないので、その食糧は国家が供給している。

中国の新聞に報道されているように、江蘇省南部においては農業生産力の低下現象が、たしかに部分的には認められる。郷鎮企業としての商業・工業が発展し、人々が必ずしも農業を重視しなくなったのである。農業を止めて土地を荒廃させるという事態も見られた。1982年、政府は、土地を荒廃させている農民には、工場への就労を禁止する措置をとった。

ただ、将来についていえば、「棄農作工」、すなわち農業を離れて工業に従事する志向は強まり、工業従事者数は増加するであろう。

ちなみに、李氏の概況説明によれば、長青郷で工業経営を行っている企業は合計で95、そのうち郷営のもの21、村営のもの74であり、労働者の合計は6,248人である（郷の総人口16,323人と対比するとその比重は非常に高いといえよう）。95の企業の主たる業種は、化学、建築、紡績、〔その他の〕軽工業である。このうち〔全国レベルの〕優秀製品が7つあるが、なかでもプラスチックの泡立て用の添加剤〔の生産高〕は全国の第2位を占めている。長青郷の1987年の1人あたりの平均収入は1,012元（1985年比115元増）であったが、工業従事者（農業と工業双方に従事するもの）の平均収入は1,453元であった。

また、非農業部門の一翼を占める商業については、全商店数が164、その内、集団所有制の経営（「集体企業」）が74、個人経営（「个体戸」）が90である。質疑の中ではさらに次のことが明らかにされた。個人経営者には零細な販売者（「小販」）として蘇州市へ出かけるものが多い。その際の商品としては、野菜、とくにまこも、そして果物等がある。個人経営者のうち、地域

で店舗を構えるものとしては、理髪店、裁縫業、各種の修理業などが多い。裁縫業は地域間の価格差を利用した仕事であり、蘇州市などの都市から〔原料を〕仕入れ、それを〔加工した上で〕販売している。

李氏との懇談を終え、郷政府辦公室の近くの工場を見学したのち、花を専門に栽培している農家、すなわち花農のうちの一戸、王柏平氏宅を訪問し、多方面からインタビューを行った。

花農王氏の栽培面積は2畝である。花農の場合、生産隊（自然村）の1人の男子労働力につき5,000元の年収がある。

生産した花茶（ジャスミン）は従来蘇州市の〔製茶〕工場と契約を結んで契約額を引き渡し、また浙江省の〔製茶〕工場にも売り渡していた。契約の場合には契約額の納入が義務付けられ、残余の部分を自由に販売する。浙江省の場合には向うから〔必要に応じて〕買い付けに来る。王氏は、契約栽培と自由栽培を大体50%ずつ行っていた。しかし、1988年からすべて自分の自由意思で栽培・販売することにした、という。

王氏によれば、栽培している花は三種類であり、次のような手順を踏む。〔三種類の〕多年生の木を10月末に三種類の花ハウスに入れ、4月15日に外に出す。6月20日から7月15日に花のつぼみをはじめて採る。これを含め半年間で2回採る。10月末になり、花の植木鉢をハウスに入れるとはじめてのんびりできる。ハウスに鉢が入っている冬の間、それまで鉢を置いていた野外の土地を使用することは普通にはあまりない。なぜなら鉢の下の台はハウスに入れなくてそのままになっているからだ。たまには季節野菜を植えることがある。

王氏のインタビューの中で得られた貴重な情報の一つは村についてのものである。これは同氏が村長であることと関わる。

この場合の村とは、先述のように行政村のことである（以下、この項での“村”は行政村をいう）が、王氏によれば、その下に組（村民小組ともいう）があり、自然村を指す。そして、前者が人民公社時代の生産大隊に、後者が生産隊に当たる。村には二つの主要な活動がある。一つは、いわば村の事業であり、一つは村の財産の管理である。村長は、村の事業として、(1)文化教育事業、(2)建築事業、(3)公共の福祉の三つについて責任を負う。なお、建築が村の事業であるという意味は、たとえばある農家が増築を行う際には、建物のそばの土地をどのように利用するかについて、当該の農家とそれ以外の農家乃至村自体とのあいだで調整が必要になるということである。村長による村の財産の管理は、村営の企業〔の施設〕やハウスなどを対象とする。ハウスは従来は村に管理権があり、今年になってはじめて個人経営にされたのである。

村長は選挙で選ばれ、その任期は3年である。選挙のしくみは村のしくみを反映している。まず村民は各組を単位に村長候補者の名前を挙げ、選挙に参加する代表を決める。具体的には、9つの組から10数人の候補者の名前が挙げられ、全部で50～60人の代表が決められる。代表たちによって10数人の中から3人の村長〔及び副村長〕が選出される。——この説明の中で、組＝自然村が村＝行政村の基層組織として機能していること、選挙がそれ自体の取り決めに基づ

いて現実に行われていることなどが明らかになったが、組の代表の決め方、選挙の全過程における共産党の関与のありかたなど、さらに確認すべき点ももとより残っている。また、組が各農家にとってどのような比重を占めているか、地縁的な共同組織としての機能をもっているか、という問題に関連する王氏の次のような発言は興味深い。すなわち、(1)王氏と近所の人々、(2)王氏と親戚、(3)王氏と友人のいずれの関係が王氏にとってより重要な意味をもつかを質問したところ、王氏は三つともほとんど同じだと答え、(1)、(2)、(3)のいずれかが優越しているとの見解を示さなかった。組の結合と重なる近所の人々との関係は、親戚及び友人との関係よりも優越しているわけではなく、さりとてこれらより劣っているわけでもない。

村・組を単位とする行政組織や社会結合とは別に、私たちは、生活圏及び通婚圏についても初歩的な質問をした。買い物に行く場所と回数については、長青郷の東南の隣郷で、長青郷と蘇州市とのあいだにある虎丘の名が挙げられ、人によっては1日2回、その他、自転車に乗れば約20分で蘇州市に買い物に行くことができるという。通婚圏については、その前段階としての青年男女の交際は、同じ郷同志である場合が多いが、虎丘山の近くの人も含まれる。

王氏は家族構成、その職業や収入についても丁寧に質問に応じられた。すなわち6人からなる同氏の家族の内訳は次のようである。

- | | |
|---------|------------------------------|
| 父の姉 | 労働はしていない。 |
| 夫(王柏平氏) | 花農。 |
| 妻 | 絹織物工場(郷鎮企業)。 |
| 長女 | 蘇州市の牛乳製品工場。 |
| 次女 | 高級中学(高校)を出て化学工場(郷鎮企業か)に就職予定。 |
| 長男 | 9月から初級中学(中学)入学。 |

夫の収入は1987年の一ケ年で7300元、妻と長女の二人で3000元になる。合計で1万元である。このうち夫〔と妻〕〔家父長〕の収入で生活費をまかなっている。娘の収入はそのまま結婚資金として積み立てている。なお、王氏の家は2軒の二階建の家が前後に連結されているが、そのうち前の家は1986年に13,000元で、後の家は1981年に7,000元で建築された。

なお、若者3人を家に抱えた王氏に対して、若い人の農業への気持ちについて質問した。若者の職業は、農業・非農業別の戸口(hukou 戸籍)によって決められる。換言すれば、農村戸口である以上、都市の工場・企業に正式に就職することはできない。しかし、今日村営企業の収入が多くなってきたのでこの村に残りたいという青年が現れるようになった。ただ、蘇州市の牛乳製品工場に勤務しているという王氏の長女の場合、その工場が長青郷内にあれば容易に理解できるが、蘇州市内にあれば、この長女と農村戸口との関係はどうなるのかという疑問が残った。

ちなみに結婚式に必要な費用は、上海の男性の場合5,000元ほどといわれているが、ここでの息子の嫁取り、娘の嫁出しについて質問したところ、それぞれの親の経済的实力によって相

違があること、10,000元から6,000元乃至5,000元程度であるとの答えであった。

六. 周荘鎮 (8月4日)

午前8時40分、宿舎をマイクロバスで出発し、大運河沿いの公路を南下し、呉江県人民政府の所在地松陵鎮でこの公路を離れて東へ進み、同里鎮市街地の南端にあるバス停をさらに東へ直進し、屯村につく。屯村は、建制鎮ではないが呉江県東北端の水上交通の要衝であり、新設の大きい道路が市街地中心部を貫き、活気ある市街地をもつ堂々たる小城鎮である。清代の順治初年、17世紀半ばに、ここを対象とした郷鎮志である『屯村志』が編纂されたのも、この水上交通上の位置と無縁ではないであろう。しかし、ここから東南へ進み、目的地である崑山県の西南端周荘鎮へ赴こうとして思いがけない障害が出てきた。蘇州の知人から昨1987年に開通したと聞いてきた同鎮への公路がないのである。マイクロバスの若い運転手さんが幸いにも非常に親切で、一隻の焼き玉エンジンで走る漁船をチャーターしてくれ、屯村にマイクロバスを置き、運転手さんともども水路周荘鎮へ向かった。点心類を並べる小販の集まっている船着場を離れると、大きなクリークに出、東南へと進む。岸边にある小さな船着場は定期航路のためのものであろう。20分ほど行くと白岷湖へ出る。満々と水をたたえた大きな湖で兩岸も行く手もかすんでさだかには見えない。木材を運ぶ長い筏、長江流域に普遍的な、幾隻もの焼き玉の舟を連ねた輸送船団、さらに浚漉船などがつぎつぎと現れては反対方向へと去っていく。晴天にもかかわらず地上のあの湿気をともなった猛暑はなく快適である。白岷湖内をゆくこと30分、前方に高く細い塔と工事中の大きな橋が見える。それから10分、屯村出発後約1時間で周荘鎮に入った。市街地の中心部へと比較的狭い水路を進んだあと、船着場につく。みかげいしの上に船のロープをかけるフックが設けてある。左手へ下船するとすぐ上の道路が露店の自由市場になっている。少し前方へ進んだところに縫製工場があった。飛び込みの見学を快く許してくれたので、一同中に入り、入口の右手の事務コーナーにいた数人の経営スタッフや作業中の若い女子労働者たちと話す。この工場は周荘鎮の経営する、すなわち鎮辦の工場であり、シルクの縫製にあたっている。原料は隣接する呉江県の国営工場から仕入れるという。ミシンは国産のものを使用している。仕立てている黒い服はアラブのイエーメンに輸出するもの、ねずみ色ものは国内用だという。将来は、経営規模を拡大し、原料も呉江県の国営工場経由で入手するのではなく、自らの力で仕入れたいとのことであった。慣れ切ってだらんとしたところのない、新鮮な活気が感じられた。

ほどなく老街に入る。他の鎮の場合と同様に石畳の道路そのものが非常に狭く、市街地全体もさほど広くはないが、他の鎮よりもすべてが昔ながらの形を崩さずにコンパクトにきちんと残っている。部分的にはアーケードが設けられているところもある。太子橋という石橋を渡ると向かって左のまた細い石畳の道が伸びているが、橋のたもとに小さい煙草及び雑貨を取り扱

う店がある。こうした規模と内容の店が周莊鎮全体で10数軒あるという。店番の娘さんもその母親も蘇州・上海近郊の小城鎮の人たちに比べてより質朴な感じがする。一人が煙草を買い、外貨兌換券(いわゆる外匯)で支払おうとするが、この外国人専用貨幣についてもまったく知らない様子である。おそらく私たちはここ10年ほどの開放政策実施以来周莊鎮に入ったほとんど最初の外国人でもあるのだろう。さらに進んで向かって右の諸店舗の背面を流れていた狭いクリークを渡り、今まできたのと逆にクリーク沿いの石畳に行く。するとこのクリークの南岸に古い建物がびっしり並んでいる。ほどなくクリークに明の万暦時代の「雙橋」がかかっている。その近くに明代の建物「張廳」がある。解放前までは地主の住んでいたこの家には、1963年から一世帯と解放直後からの一世帯との合計二世帯がそのまま住んでいる。食事にもかわらず、この二世帯の人々は私たちを中に招き入れ、質問に応じて下さった。随所に立派な木材が使っている。日本の建築用語でいえば、柱、棟木(むなぎ)、母屋(もや)、桁(けた)、梁(はり)、垂木(たるき)のいずれも素晴らしいが、とくに彫刻を施した大きな梁とそれとともに天井を支える一連の垂木及び輪垂木(わだるき)が素晴らしい。昼食のため、「雙橋」を渡り、北へ進んでにぎやかな商店街へ出、周莊鎮飯店という大衆食堂に入る。内部はとても広い。農民の家族連れでほぼ満席に近い状態である。みんながさかんにしゃべりながら愉しそうに食事をしている。その中で突然大事件が起きた。ある農民が米飯の食券をもらったにもかかわらず、まだもらっていないと言い張り、店の女子の服務員たちとのあいだで劇的な口論になったのである。そうこうしているうちに農民の態度に怒った女子の服務員の一人が木の椅子をふりあげ農民に殴りかかろうとした。満座がはっと息を止めたとき、他の服務員が必死で制止し、この騒ぎは収まった。逆上した激しい気性の服務員は、あとで私たちのテーブルに食事を運びにきてくれたとき、ことの顛末を語るとともに、私たちがこの鎮を本拠として活動した元末明初の富豪沈万三の遺跡や明清時代の古い住宅の保存について調べようとしているのを知ると、進んでこの鎮の文化行政を担当する莊春地氏のところへ私たちを案内してくれた。

莊氏は周莊鎮文化站(文化センター)の責任者である。同氏はまず私たちを「沈廳」という掲示のある邸宅へ案内された。明の呉県の人、天順二年(1458)から嘉靖25年(1546)までの長いあいだを生きた楊循吉はその著『蘇談』で「万三の家、周莊に在り。破屋猶存す」と述べている。このように、明代中期まではまだ残っていた沈万三の邸宅は、私たちの伝聞に反してすでになかった。この「沈廳」は屋内に掲げられた説明板によれば、原名を敬北堂といい、のちに松茂堂と改められた。清代の乾隆7年(1742)沈万三の子孫にあたる周莊鎮の社倉長沈文淵の子沈本仁の建てたものである。同氏が私たちに下さった崑山県周莊文史徵集組編『江南水郷古鎮周莊——周莊建鎮九百周年記念(1086-1986)』(1986年)所収、張寄寒氏の「古鎮“四廳”」という一文では、1世紀早く明末清初によって再建されたものである、としている。間口はさほど広くないが、奥行の深い素晴らしい古建築である。道路から奥へ、中心線に沿って合計7棟の建築が続き、5つの門樓がその間に配置されている。合計で大小100に近い部屋が

あり、それらが2,000平方メートルの敷地の上に立っている。とくにその主屋は非常に大きかった。主屋の広い階上に昇り、各棟が階上の通路によって相互に連絡している様子がよく分かった。張寄寒氏は「この住宅の中の主廳（主屋）の梁や棟木は上質の木材を使用しているので、湿度の高い水郷にあるにもかかわらず、数百年のあいだ腐朽することがなかった」と述べているが、決して誇張ではなく、見るからにがっしりした造りである。この「沈廳」で興味深かったことの一つは私たちが入ってきた正面にも、いちばん奥にあたる裏側にもクリークがあり、双方を利用できるようになっていることである。ちなみに、莊春地氏は現在でも周莊鎮には沈姓が多いと話された。周莊鎮には古建築が少なくないが、その中で、先述の「張廳」、この「沈廳」に加え、「迓廳」、「章廳」、「周廳」があり、五大廳といわれている。このうち、後三者は今回直接見ることはできなかったが、「迓廳」と「章廳」とはいずれも明代の建築で、石製の「庭柱」と木製の門扉が残されているという（張寄寒氏の文章）。ただこれらは、おびただしく存在するこの鎮の明清古建築のごく一部分にしか過ぎない。莊春地氏の「周莊歴史沿革簡介」によれば、鎮全体の1,000戸近い住宅の中で明清の建築は実に50%を越えているという。



周莊鎮「沈廳」主屋階上の一隅

南京で江蘇省社会科学院の研究グループと懇談した際、江蘇省小城鎮研究会会長徐福基氏は、この周莊鎮では明代以来の古建築の保存と鎮の開発とのあいだの矛盾が問題になっていることを私たちに紹介された。莊春地氏は案内の途次これに直接触れられることはなかったが、「張廳」、「沈廳」の予想以上のスケールとこの鎮の市街地の町並み自体が旧来の面影をかなりの程度に留めていることを通じて、私たちは古い歴史を今に残すこの周莊鎮における文化財保存が他の

鎮に比べて突出した重要性と困難性をもつことをあわせて理解することができたように思う。上海の同済大学建築系の教官・学生はすでに数多くこの鎮を訪問し、鎮の将来計画の作成、測量、製図に従事し、「国内にごく僅か残っている水郷古鎮」という評価を与えている(前掲書「前言」)。こうした専門家の協力は保存のための適切な手がかりを提供するであろう。

私たちは莊春地氏の案内で鎮の市街地をクリークに並行して北進し、狭い水路が東へと分流しているところに行き着き、この水路の傍の道を前進した。両側には民家が並ぶ。百メートル足らずでこの水路が急に広がり、15メートルほどの幅になり、あたりがパッと明るくなる。莊春地氏はこれこそ沈万三の故居の遺跡だという。すなわち銀子浜である。クリークの両側には農家のたたずまいをもつ住宅が並び、焼き玉エンジンを付けた吃水の浅い自家用の船が各家の船着場につないである。あひるが岸辺に浮かぶまことにのんびりした光景が展開している。

この周莊鎮は、実は中国近代史研究においては、地主でありながら佃農の境遇に深い同情を寄せ、農業経営に必要な生産費や生活費を緻密に計算した上で租——小作料の削減についての具体的な提案をした陶煦、すなわち、かの『租覈』の著者の居住の地として知られている。私たちの要求に応じて莊春地氏はその故家まで案内して下さった。私たちが船を着けた場所に比較的近い。もう相当古びているが四字の銘文のある木の額をかかげた風格のある門がある。白壁、青灰色の瓦屋根、その間に階下にはくすんだ褐色の観音開きの扉が、階上には同様の観音開きの木製の窓が沢山ある。しかし、これらの扉や窓にももとはめてあった明かりとりのための貝殻は、階下の扉の部分では剥落がひどく、ビニールがはりつけられていた。あの「張廳」や「沈廳」の豪壮な邸宅とは異なるが、清末の読書人の居宅の雰囲気はそのままに残されている。奥の庭まで拝見させていただく。どの部屋にもほとんど家具らしいものはない。台所のそばの居間とおぼしきところに木製の昔風の椅子が二、三脚、そのうちの一脚の上に魔法瓶が三本、竹製の手さげかごが壁に一つ、椅子の脇に一つ。主人の生活はきわめて質素と見受けた。その主人こそ、陶煦の孫にあたる方であった。黒のズボン、青灰色の長そでのシャツを着て応対して下さる。私たちは、日本では岐阜薬科大学の鈴木智夫氏が『租覈』を神田の古本屋で発見され、その訳注と分析を行なって陶煦の地域における活動を明らかにされたこと⁽⁵⁾を、同氏に御報告しておいた。

帰途、一望皆水の周囲を見ながら、陶煦が、大運河のラインからはるか東方にあり、上海からも奥地に当たる湖沼地帯の周莊鎮で、今の蘇州市市街地と重なる蘇州府城の官僚や郷紳とも接触しながら活動していくためには、この豊かな水を利用した水運に頼らざるをえなかったであろうことを改めて思った。遠ざかりゆく周莊鎮を振りかえると煉瓦製の高い大煙突が二本煙を吐き、崑山方面からきた公路がやがてその上を通るであろう架設中の鉄橋が西日のなかに浮かんでいた。

七. 黎里鎮 (8月5日)

木瀆鎮へ再調査に行くグループが早朝に同鎮へ出発したのち、残りのメンバーで呉江県の黎里鎮に向かう。本来、本年3-4月の予備調査の際に概略を把握した同里鎮をも訪問するはずであったが、同里鎮の側の準備体制が整わず、今回は割愛し、はじめてこの鎮を参観することになった。1987年9月下旬に森が同里鎮、震沢鎮、及び開弦弓村を参観した当時から、本年3月-4月を経て、今回に至るまで、蘇州市——呉江県松陵鎮——を中心とする大運河沿いの公路の拡幅及びコンクリート舗装の工事が少しずつ進捗している。呉江県松陵鎮から南下した公路は平望鎮に入る手前で東西に走る別の公路と交差する。この公路を東へと進むとそれに南接してまず黎里鎮が、さらに進んで汾湖を過ぎると芦墟鎮がある。やがて公路が上海市の境域に入り、北へと進むと金沢鎮に出る。

黎里鎮では二手に分かれて主に旧来の市街地と古い住宅や祠廟を観察することを期した。この黎里鎮は、市街地の50%が明清の古建築という周莊鎮とは様相を異にする。もともと市街地の中心線をなすクリークが周莊鎮のそれに比べて幅広い。クリークの両サイドの道のうち、南側のそれは、各家の前面に組みこまれた在来のアーケードを部分的に残して狭いが、北側のそれは、もともと6-7メートルの幅をもつものであったことにも規定され、明るさがあり、市街地の開発はかなり進んでいる。にもかかわらず、表通りを含め、解放前からの建物はまだ多い。一步表通りから奥へ入ると、旧態依然の様相がある。森と大阪大学大学院生の藤田佳美氏は、訪問予定の建築の所在へのアドバイスを得たいという目的をも抱いて、中心クリークの北側の広い道に南面する柳亜子(名は棄疾)の記念館、すなわち、1911年の辛亥革命から49年の新民主主義革命まで中国の政治的革新に一貫して関与してきたこの詩人の故居を訪問した。記念館では館長の殷安和氏、同記念館副館長で黎里鎮文物保管所所長の汝孝先氏が歓迎して下さった。清末の1887年、呉江県に属する黎里鎮近郊の農村で生まれた柳亜子はその後黎里鎮のこの家を借りて移り住んだ。清朝を打倒して中華民国を成立させた辛亥革命の過程で、彼はこの動きを推進した政治結社たる光復会、同盟会に参加した。柳亜子及びその全ての家族員の寝室、彼の使用した机、書架、また官憲から逃れるため柳亜子が身を隠した精巧な複壁などを一つ一つ丁寧に紹介していただく。借用していたとはいえ、当鎮の一般の庶民住宅のレベルをはるかに超えるこの故居を見て、想起せざるをえないのは、同じ呉江県の最南端に境を接する浙江省桐郷県烏鎮鎮(烏鎮という鎮)の中心街にある作家茅盾——沈雁冰——の堂々たる故居のことである。茅盾は、柳亜子よりややおくれ、辛亥革命後の民国初年の新文化運動から出発したが、この二人はともに江南デルタの鎮及びそこで集積された富と深く関わっていたのである。連想は、かの甬直鎮を新文化運動の最初の活動の地とした葉紹鈞にも及ぶ。

記念館の参観を終えたあと、今度は、こちらから、嘉慶10年(1805)刊の『黎里志』(16巻・首1巻)、光緒25年(1899)刊の『黎里統志』(16巻・首1巻)所収の橋と祠廟に関する記事を

提示し、そのうち現存の数少ないものを教えていただく。それらの観察は午後にまわし、昼食までのひととき、アーケードのあるクリークの南側の道に開いた狭い弄の奥にある「黎里鎮托児所」、すなわち保育園を参観する。江南の小城镇の市街地に普遍的に見られるように、黎里鎮にも人間が1～2人ようやく入れる位の狭い間口をもち、奥行のとてつもなく深い「弄」がびっしりとある。京都市の旧市内中心部、上京区、中京区、下京区、北区の古い町並において、表通りに狭い入口を空けて設けられているあの石畳の「露路」とよく似ている。「露路」とちがうのは、より狭く、また屋根によって覆われ、光線がさえぎられていることだ。この「黎里鎮托児所」は「托児所弄」という表示のある「弄」を奥へ進んだところにある。木を存分に使った大きな踏み台のようなものが沢山置いてある。乳児の保護椅子とでもいおうか、まだ完全には歩行できない赤ちゃんが両手を一杯に広げてつかまっている。ベッドもがっしりと組み立てられた木製で、底部の足にやや反った木を組みこみ、ロッキングできるようになっている。先述の京都の旧市内中心部では、家々の間口は狭いものの、奥行は深く、各部屋や土間、庭などを一括して整地すると意外に広い空間ができあがるが、それと同じように、この「托児所弄」も内部はずいぶん広い。全体として、道具・什器には乏しいが、心の豊かさを感じさせる施設である。

昼食を円月飯店という大衆食堂でとったあと、古い建物を見てまわる。南面している柳亜子記念館と同じ並びに間口0.6メートル、やっと大人1人が歩けるほどの「毛家弄」という狭い「弄」がある。その入口に「黎里鎮文物保護控制單位 毛宅」という掲示がある。奥へと進むと「弄」の向かって左側には、ちょうど周莊鎮の「張廳」のように太い柱とがっしりした大きな梁と輪垂木とで支えられ、高い天井をもつ見事な住宅があり、幾部屋も続く。木製の扉にはその腰板にあたる部分に丹念な彫刻が施してある。入口から入ってすぐの北面する壁には「取余成大」の磚製の牌が組み込んである。壁は煉瓦製で白塗りがしてある。この「毛宅」も「張廳」と同様に鎮の人びとの住宅として使用されている。表へ出ると古い太鼓橋が一つ、原型のままで残っている。しかし、先述の『黎里志』や『統志』に名のある橋の中には、その名前と原型の一部とを留めてすっかり改造されているものもあった。「毛宅」の並びにはさらに「呉江県文物保護單位 東聖堂」がある。「弄」の奥にあるのではなく、表通りに門を開いた白壁の堂々たる建築であるが、扉は堅く閉ざされたままであった。

「永新弄7号」という地番表示の下に、赤いふちとりの中を黒子で刷りこんだ毛主席語録がはがされきれずになお残っていた。「われわれは謙虚で、つましく、驕ることのないようにすべきである、云々」の語が読める。茶館がある。朝方のにぎわいが去ったのか、ランニングの一人、半袖シャツの一人が黙々と腰掛けている。店番は老人が一人。この茶館には経営形態に関するいくつかの掲示がある。一つは、1987年9月15日に呉江県税務局が発行した「税務登記証」であり、以下の内容をもつ。

单位名称 呉江県黎里鎮万雲台茶社

単位居址 黎里鎮平樓街18号

経済性質 合作商店

主營業務 茶 開水

経営方式 茶室 零售

核算方式 独立

すなわち、この茶館は、万雲台茶社という名称をもち、経営形態は合作商店、つまり、幾戸かが資本を拠出して共同経営する形態で、国営でもなく、个体経営でもない、いわゆる集体企業である。茶と開水——熱湯を、四角いテーブル8つに長椅子を並べた茶室で小売りすることを業務としており、独立採算制をとっている。この「税務登記証」は営業許可証の性質をも帯びているが、この種の証明書は江南デルタの小城鎮の各商店にも一般的に見られるものである。支塘鎮の高東茶水店のように、「税務登記証」に、そのものずばりの営業証明書にあたる「営業執照」、「食品衛生許可証」を加えた三点セットが本来どの商店にも交付されているはずである。森が1983年5月と8月の2度訪問した上海市青浦県朱家角鎮の四季春点心店、1987年9月に立ち寄ったこの呉江県の震沢鎮にある為農茶水商店にもこれらの証明書があった。ただ、この万雲台茶社には、別種の書類が張り出してあった。一つは5人の従業員の7月の休暇状況の表であり、最後に「徐会計 万雲台史可祥 88.7.31」の署名がある。また一つは5人の従業員の収益の分配率に関するものとみなされ、5人のそれぞれについて「基本分」に対する比率が出ており、最後に前者とまったく同じ日付と署名がある。この両者は白紙に手書きで書かれている。それとは別に赤インクで活字印刷された「黎里鎮集体商業奨励工資審批表」があり、青いボールペンで1988年6月30日の日付と、夥しい項目にわたる数値とが記入されている。これは従業員の毎月の「獎金」の支給額を監督機関が審査の上承認するための文書である。その最も下の欄外の「負責人」の項には史可祥の角印が、「会計」の項には徐五盧の角印がそれぞれ捺してある。

中心クリークの北側の道に南面する町並みは、万雲台茶社の「税務登記証」にもあったように平樓街という。その一番外れ、橋があり、クリークの幅が広くなり、大きな商店や倉庫が軒を並べ、小さいクリークが南へ分出するあたりに、土地廟があるはずなので、懸命に探す。しかし、橋のたもとを北に進んだところで探し当てたとき、そこにはもはや廟といえる面影はなかった。白い壁でいくつか仕切られ、わずかにしっかりした梁のある一民家の部屋や、観音開きの扉をつけた主屋の名残と思われる別の民家の高い二階に辛うじて昔の面目を留めていた。この辺りの大きい商店の一つ、農機具を販売する店に入り、クリークのきわまで大きく屋根をせりださせている対岸の店についていろいろと尋ねる。かつての米行——米間屋ではないか、というのが私たちの予測であったが、実は船を漕ぐための櫓を販売する櫓行であった。

中心クリークの南岸沿いに周氏の宗祠を求めて、もときた方向、つまり西方に戻る。途中に「染坊弄」という興味深い「弄」がある。「弄」の住民はこの名称の由来については何も知ら

ない。「染坊弄」近くの小学校の先生から南市街にあるいま一つの小学校の構内に目指す宗祠があるという情報を得、どんどん西へ進み、午前中に公路からまず辿りついた市街地の中心点に到達、さらに西へと進む。ふと見ると、「南蒯家弄」の地番表示のそばに、「黎里鎮文物保護控制單位 南蒯宅」の掲示のある民家がある。白塗りの煉瓦で囲まれた門の板戸がしっかりと閉ざされたままである。さらに西へ行き、ようやく南市街小学校に入る。上半身を裸にして改修工作中的の七、八人の青年に廟の所在を聞く。教室のある一角から中庭に出ると御影石の6段の低い階段が見え、最上段の上方に飾りのない平凡な木の扉があり、「吳江県文物保護單位 周宮傳祠 時代 清乾隆六十年 公元1795年」という1986年11月に作られた掲示板が打ち付けられている。正面から見ると左方にずっと白塗りの壁が伸びている。青年たちと一緒に半開きになっていた扉をくぐると巨大な方形の空間が広がっていた。壁面にはめこまれた柱とは別に部屋の空間に四本の円い大きな柱が高い天井に伸び、柱と柱とのあいだには太い貫(ぬき)があって建物を固定させている。天井は壮観である。左右に長い切妻型のこの天井を支えるため、太く長い棟木と4本の母屋が渡してある。この棟木を支えるため、部屋の中央部に、棟木と直角に合計3本の雲形模様を施したこれも非常に太い梁が、棟木・母屋とがっちりかみあわせてある。营造式でいえば、支点が7つあるところの7架の小屋組みになっているわけだ。部屋の中央の奥まったところに一種の床の間のような場所がしつらえてある。かつてそこは位牌を置く祭壇だったのであろう。内部はこの小学校の改修のための作業場兼物置ようになっており、かんなくずが山積みされている。唯一のアクセントは床の間状の部分の最上部に「慶祝元旦」という赤い文字を書き付けた紙が貼り付けてあることだけだ。青年たちの話ではこの祠堂はかつて小学校の講堂として使用されていたという。「慶祝元旦」の文字はその折の名残であろう。この巨大な、しかし荒れるにまかせた祠堂に接して私たちの抱いた複雑な想いを、青年たちの底抜けに明るい笑顔と応対の中で振り払い、ふたたび午後の暑い日差しの中に出た。

八. 盛沢鎮 (8月6日)

この日は本来明清時代から1980年代の現在に至るまで絹織物工業の第一線にある盛沢鎮の絲織史辦公室を訪問し、同辦公室の一関係者と質疑応答しながら、この小城镇の歴史と現状に果たした工業の役割について知見を得ることを目的としていた。この関係者は蘇州大学の王翔氏の知人であり同氏を通じて万端の手配が進んでいるはずであった。しかし、朝になって吳江県の外事辦公室からの通知がないという理由でこの計画の中止を聞かされた。ただ、その名声にも関わらずいつもバス停を通過するだけに終わっていた盛沢鎮の地を踏みたいという私たちの意欲は強く、ここ数年の間通いなれた大運河沿いの公路をマイクロバスで同鎮へと南進した。吳江県松陵鎮を過ぎ、平望鎮に入り、ここで大運河からやや離れてその西方を南進する公路を嘉興市方面に向かう。平望鎮からしばらく公路の左右に展開する光景は江南デルタ中でももっ

とも水の豊かな一帯であり、陸地は水に浮かぶ島のようにさえある。やがて緑濃い水田が大豆を植えた畔道でワンストライプごとに区切られていく風景に変わり、再び湖沼が見え隠れするうちに、呉江県の7つの建制鎮の一つで、それらの最南端にある盛沢鎮につく。ここで自然地理グループは「東海」、東支那海まで遠出してデルタ生成過程解明の手がかりを得るべく嘉興市方面に行く。歴史及び人文地理グループはまず鎮の老街を参観する。森は足を故障した一メンバーと人力車に乗り、この鎮に生まれたベテランの車夫に老街の案内を頼む。標準語を解し、私たちにもなんとかわかることばで話してくれる年配の車夫がもっとも典型的だとする老街とは、鎮の中心部近くに広がる住宅街であった。幅2メートルにも足りない狭い御影石の道を人力車は巧みに進む。この狭い道の両側に、二階建、あるいは平屋建の民家がびっしりと立ち並んでいる。周莊鎮の民家よりはもとより新しいが、いずれも解放前からのものと判断される。今年見たばかりの木瀆鎮、周莊鎮、黎里鎮、これまでに森の見た数多くの鎮、たとえば、上海市の朱家角鎮、羅店鎮、諸翟鎮、高橋鎮、同じ呉江県の同里鎮、震沢鎮、浙江の唐棲鎮、濮院鎮などに比べると、白壁と瓦屋根のどっしりした造りが多い。蘇州市や常熟市など、江南の古くからの整った城郭都市の場合、あるいは浙江の南潯鎮、烏鎮鎮といった大鎮の場合と近似しているように思える。ただ、同じ老街でも商店の並ぶやや広い通りには、階上階下とも木造、とくに階下のはめ板(板壁)にあたる部分にも良質の木材を使用した民家、福建の福州市にまま見られるようなそれも少なくない。

人力車の車夫の話では、盛沢鎮の老街にある商店街は、1980年までは、この鎮における商品売買の唯一のセンターであり、周辺の農村の農民もここで売り買いをしていた。1981年から、老街とは別の場所に自由市場が設置され、そこで農民による販売が行われるようになったという。その自由市場に行ってみる。今、江南デルタの多くの小城鎮に見られる規模の「農貿市場」がそこにあった。中央にトラックが入ってなお1メートル以上を余すような広い通路があり、その両側に商品を並べて客と取り引きする売り場が設けられている。常設の櫃台(品物を並べる台)は置かれていない。この市場は、すなわち中央の通路の方向が約80メートル、よこ、つまり通路と直角の方向が約12メートルの長方形で、鉄パイプの支柱を沢山用い、通路の上が半円形の、売り場の上が平たいビニール製の屋根で覆ってある。午前も10時半をまわった場内はもう商品の大半が売りつくされ、客も少なく静かであった。

盛沢鎮の経済的力は、しかしながら、いずれも近年の開業になる次の二つの施設によって代表されている。一つはホテル星獅酒家であり、いま一つは絲綢市場である。星獅酒家は旧楼と新楼とからなるが、新楼では欧米式の外観をもつロビー・売店・レストランのブロックと中国式の白壁と朱色の瓦屋根とをもつ二階建の客室群とが結合されている。食事をするためにレストランに入った私たちには激しい暑さをしのぐ完全冷房が快適であった。レストランの壁面には中央電視台の取材・撮影への協力に対する感謝、呉江勝天熔断器廠の現金拾得に対する感謝、呉江県公安局の捜査協力への感謝(「衷心感謝対偵破七・一七案件の大力支持」)など、昨

87年10月から本88年の7月にかけて贈られたところの金の縁どりに赤地・金文字のペナントが掲げてあり、このホテルの新楼の歩みを示すものとなっている。このホテルは隣接するシルク製造の大きな工場が兼営していた。

絲綢市場は正式には「東方絲綢市場」と称する。盛沢鎮の市街地からはクリークを越えて約0.5キロ西方にある。合計4ブロックの壮大な卸売り市場で、小売り部門をも内に含む。その内容は以下の通りである。第一市場が鎮の市街地にもっとも近いブロックである。

第一市場 小商品（日用品）

第二市場 化繊（化学繊維）

第三市場 紡機配件（紡績機械の部品）

第四市場 絲綢原料（絹織物の原料）

第一市場の門前には数十メートルの幅をとって「東方絲綢市場」の紅色の六文字が一つ一つ掲げられ、その中央部の牌楼を形どった中国様式の門の屋根には、右の六文字からなるネオンが設けられ、その下に費孝通の書になる「日出万匹 衣被天下」（日ごとに万匹を出し、衣もて天下を被う）の金文字の扁額が掲げられていた。門から正面奥の方向へまっすぐに、階上のないスレート葺きの長屋のような建物が幾本も走っている。また、この長屋状の建物とは直角の方向に、また何列もの長屋状の建物が配置されている。つまり、第一市場だけで、たて100メートル以上、よこもやはり100メートル以上あるブロックの内部に、長大な建物が縦横に数多く設けられ、それぞれが、柱と柱との間、約4メートルの部屋に仕切られ、その一部屋一部屋に地元の呉江県を中心とする数多くのメーカーや商店がテナントとして入り、営業を行っているのである。「呉江県壇丘新絲織廠經銷部」、「呉江県開弦弓絲織廠」、「呉江県新生絲織廠」、「呉江県新民絲織廠銷售部」、「江蘇省紡織品公司呉江紡織批發經營部」、「上海石化・平望絲織聯營廠」、「嘉興工芸染織廠門市部」、「四時化織店」など、テナントのない部屋はなく、すべてこのように企業の看板が出ており、まことに壯観である。門から正面奥に伸びている道の突き当たりに「東方絲織市場經理部」がある。このオフィスが第一市場のみならず、いわゆる「絲綢市場」の全体の管理に当たっているものであろう。

第二市場を歩きながら立ち寄ったある店の店員の話では、この巨大な市場はもともと第一市場のみで出発したが、市場への要請が非常に強く、結局四つの市場を設けることになったのだ、という。また、第三、第四市場は大体の工事はできているが、まだ完成していないとのことであった。たまたま参観したのは午後2時頃で各店の前に自転車こそ置いてあるものの、店員も客もこの暑さの中でゆっくりと午睡をとっている模様であり、市場は静まりかえっていた。しかしながら、そのスケールの大きさにはただただ圧倒され、一通り場内を歩いたあとにはどっと疲れがでてきた。「絲綢市場」はかくして盛沢鎮が現在においても明清時代を含む過去と同様に繊維工業の中心地であることを私たちに十分に印象付けてくれた。ただ、ひとつだけ、それと相反する経験があったことを記さねばならない。それは、化繊製品が日用品の卸と小売り

をする第一市場では、それを専門に扱う第二市場が存在するにもかかわらず、取り扱い商品中の圧倒的な比重を占めており、生粋のシルク——本来の絲綢を扱う店はわずか1軒だったことである。盛沢鎮はすでに単純な意味でのシルクの里ではなくなっていたのである。

工場見学を期し、午前中、盛沢鎮人民政府に立ち寄って再三懇請したにも関わらず、呉江県外事辦公室の紹介状がないことを理由に丁重に断られ、星獅酒家の経営主体である隣接の大工場の担当者とも昼休み故に連絡のとれなかった私たちであるが、「絲綢市場」からの帰途、その筋向かいの盛沢郷中学の構内にあった同中学附属の化学繊維の織布工場を参観することができた。一つの棟では、会話も困難なくらいすさまじい音を発しながら4台の電動織機が作動しており、若い女性2人と年配の女性2人が1台ずつを受け持って緊張した作業に従事していた。年配の2人は私たちをにこやかに応接してくれたが、作業の手を休めることはできず、この工場についての詳細を把握することは困難であった。道路寄りのいま一つの棟にはより多くの織機がずらりと並んで稼働していた。中学に工場が併設されているケースは、森の見聞の範囲内でも南京市の山西路の中学の印刷工場などの例があるが、この工場の経営方針や学校教育との関係を明らかにすることはできなかった。ただ、この工場の一角には「勤工儉学」の掲示が出されていた。

九. 嘉定県辦公室 (8月9日)

朝8時、7日昼より滞在していた上海市の国際飯店を出発し、復旦大学歴史系副教授樊樹志氏の同道を得て、1時間半で同市市区の北方嘉定鎮にある嘉定県人民政府に到着、県辦公室の陳福明氏、嘉定県志編集委員会辦公室副主任・嘉定県志編集委員会主編の楊于白氏の出迎えを受け、ただちに嘉定賓館に入る。まもなく午前10時から今後3日間の嘉定県における活動日程について打ち合わせる。

最初に陳福明氏から、嘉定県の概況の説明があった。この説明は単なる数字の羅列に留まらず、私たちに江南デルタの小城鎮を把握する前提を提供するという性質をもつものであった。その概略は以下の通りである。

上海市の中心部、南京西路にある国際飯店から35キロ西北にあるこの県は面積480平方キロメートル、管轄下の20の郷乃至鎮に50万人の人口が居住している。50万人の人口のうち、農村〔戸籍をもつ〕人口が35万人、都市〔戸籍をもつ〕人口が15万人である。1950年代には農業が基本であったが、最近、都市と農村の企業〔城郷企業〕が発達してきた。国営、県営、鎮営、郷営の四種の経営主体がある。

このうち、農村、つまり35万人の部分についていえば、それに見合う耕地は31,000ヘクタールに過ぎない。上海に近いこの県の農村は明らかに土地が少なく人口が多い。このような状況の中で農村の経済をどのように発展させればよいのか。農村の剰余労働力は上海にいけばよい

のか、嘉定県に留まるのか。この剰余労働力は農業、副業、郷村企業とどのように関わるか。58年には農業が基本であったが、現在では23万人の農村労働力の28%が副業に従事し、72%が郷村企業に従事している。また総生産額のうち、農業・副業が11%、郷村企業が89%を占めている（陳福明氏は郷村企業または郷村工業の語をしばしば使用された）。

しかしながら、嘉定県にとっては農業は依然として非常に重要である。嘉定県の食用に必要な穀物はすべて県内で生産している。上海市のうち180万人の必要とする野菜は嘉定県が供給している。ちなみに、解放前の嘉定県では綿花が多く、米（「大米」）は少なかったが、今両者の栽培面積は均衡している。その他、68万キロの鶏と卵を供給しており、副業生産物もある。また農村の人口1人当たり1頭の豚を国家に納入できるよう農民に要求を出しているところである。従って、農業も重要な産業なのである。

郷鎮企業もそれから上がる利益の一部で農業を支えている。郷鎮企業の工場の労働者1人あたり180元、たとえば、100人ならば18,000元を当該の工場に割り当て、その額を企業の利潤から取って農業を支援するのである。さらに、国家も化学肥料、農薬、電気の供給を保証している。電気料も、農業は6分、工業用は1角2分、家庭用は2角1分、商業用は2角1分というように、等差を設けて農業を優遇している。農業の安定は国の安定につながるからである。郷村企業も農業をきちんとやって、その基礎の上に発展してきたものである。1958年から70年にかけての郷村工業は、家内手工業であった。1970年代前期は「五小工業」、5種類の小規模の工業であった。農業の必要に応じて、いずれも小規模の化学肥料、セメント、鉄鋼、農機具、金物の工業であった。それらは社隊工業であり、一つは人民公社が所有し、一つは生産大隊が所有していた。〔各公社、〕各大隊の経営のよしあしにより収益の大小があった。人民公社が解体され、政経分離が行われ、郷政府と経済機構が分けられてからは、社隊工業とは呼ばれなくなり、郷村工業、そして全国的に郷鎮企業と呼ばれるようになった。郷鎮企業の生産力水準は向上し、小規模なものから大規模なものになった。郷村工業は小さな規模の合営であったが、現在は国営の大きい工場との合営をしており、その発展速度が速くなっている。たとえば、現在嘉定県のある企業は上海自動車工場と連合しており、年間に5,000台の自動車を作っている。またある工場は、年間22万輛の自転車を生産しており、別の工場は80万台の乳母車を生産している。電球工場も重要な産業であるが、2工場、4,000人の労働者、年間1億2千万個、すなわち全国の生産量の10分の1を生産している。その他、綿紡績、毛織物、化学繊維の工場があり外国に製品を輸出している。嘉定県における郷村工業経営の工場、中小の工場は、1,200余ある。こうした工場は大部分鎮の周囲にあって、小城镇の発展に関わりをもっている。すなわち小城镇を中心として工業、商業、文化教育の発展が見られる。郷村工業の発達が小城镇の発達に非常に大きな作用を及ぼしているのである。

さらに、郷村工業が農村の経済や農民の生活に与える影響にも言及したい。1958年の農民1人当たりの収入は170元、1978年は415元、1987年は1,844元となっている。現在、農民の収入

は上海市の労働者の収入をこえている。もし、農民の収入が低ければ、農民はみな上海に行くが、そうしていない。いまは安心して農村にいる。農民の収入が増えたので〔上海の〕国営工場で働く機会があってもいきたがらない。前はそうではなかった。また、農民たちは、みな新しい家を建てており、農民1人あたり30平方メートルだが、上海市市区では5-6平方メートルである。食べるものも、衣服もいいので、現在の彼らの関心は家電製品にある。三種の神器は変化してきた。1970年代には、腕時計、自転車、ミシンであったが、78年から80年代のはじめになると、扇風機、ソファ、白黒テレビとなり、現在では電気冷蔵庫、洗濯機、カラーテレビになっている。政府は高消費を奨励しているわけではなく、貯蓄して生産にまわすことを勧めているが、農民は金があるともものを買ってしまう。最近では子供たちの教育、すなわち高校に行き、大学に進むなどのことにお金を使っている。

郷鎮工業の発達には社会福祉にも大きな影響がある。郷鎮企業の利潤のうちの7%を社会福祉に用いている。60歳の老齢の農民には少ない場合で150元、あるいは多い場合には400元、500元、600元の補助金が1年単位で出される。家に自分を扶養してくれる子供のいない老人のためには敬老院乃至福利院（福利は福祉の意味をもつ）を経営して扶養している。農民が病気になったときには50-100元という基準以内の費用は公的に負担される。

陳福明氏の説明の後、氏と私たちとの間で質疑を行った。その主な内容は次の通りである。

〔都市人口〕嘉定県の50万人のうち、都市人口とは、都市戸籍に属し国家から糧票（食糧切符）を支給されるものであり、農村人口とは農村戸籍に属して食糧を自給するものであるが、15万の都市人口の中心的部分は嘉定県城をなす嘉定鎮、南翔鎮、安亭鎮にあり、とくに嘉定鎮が主体である。

〔農村から都市への移動〕農民の中には上海市区への移住を希望する人はもちろんある。ただその場合も農民としての戸籍（「農村戸口」）自体には変化はない。上海市区に行くという場合にも二つのケースがある。第一。(1)農村の集体企業（集団経営企業）が上海市区の菜場（国営副食品市場）へ派遣されて野菜などを売り、売り終われば嘉定県に帰ってくるものである。1日で往復する。(2)職人（技術をもっている人）が上海市区に行く。しかし食糧としての米は自分でもっていく。第二。上海市区に工場の契約工として、2年、3年、あるいは4年の間働く。これは国家の労働者を募集する部局の決めた招工制度による。現在は野菜が売れていることもあって農村の労働力は安定しているので、嘉定県の人は上海市区へ行きたがらない。

大学生は卒業して職場に配置されると戸籍が変わる。これは農業戸籍が都市戸籍に変わるケースである。高校（「高中」）・中学（「初中」）を出て郷鎮企業に入り、この企業から嘉定県の上海科学技術大学に派遣されたものは、また郷鎮企業に戻る所以で戸籍の変化はない。

ちなみに、子供を大学に行かせるかどうかについては各家族で考え方が違う。一人っ子政策の下でどの家族でも少なくとも知識や教養を身につけさせたいと考えているが、こうした今日のいわゆる教育熱の中でも、高級知識分子はその子女を大学へ入れようとするし、その他のも

のは実業に就かせようとする。

中学卒業生で成績のいいものが高校に、それ以外のものが高専あるいは技術学校に行くという傾向もある。

[農業生産の現状] 嘉定県の農地は31,000ヘクタール。そのうち米の栽培面積が70%、野菜が15%、綿花・果物が15%である。しかしながら、二毛作をどのように数値にカウントすべきかという問題もある。二毛作を含めると、米に麦をあわせた穀物の比重は65-75%になるであろう。穀物・野菜には自給部分を含めて一定した需要量があり、栽培面積もそれに対応している。その他は市場の状況に従って決めるが、綿花の栽培面積には以前と比べて変化がある。上海の綿花の質は良い。しかしながら、価格が不安定であること、郊区(都市郊外)にあるため土地が狭く収穫率はあまり高くはないことなどにより、約20%減少した。

[農民の栽培作物の選択] 野菜の栽培地域には二種類ある。一つは新蔬菜区で県内でも上海市区に近い地域であり、いま一つは栽培技術や経験を豊富にもっているところで、県内の黄渡鎮等がそれにあたる。県政府が決定し、郷政府が指定する面積が80%、農民が自由に選択できる面積が20%である。野菜の栽培と供給とはすべて生産隊(自然村)を通してなされる。

農業生産責任制や農業税との関係は以下の通りである。

[農業生産責任制(「承包制」)] 土地は生産隊(自然村)によって管理されている。農業戸籍に属するものであれば、工業労働者(兼業農民)にも、副業農民にも、農民(専業農民)にも1労働力あたり1畝の土地が分配される。嘉定県で確保しなければならない食糧(「糧食」)部分はいずれも彼らから徴収する。実際に耕作しない人が他人に土地を預ける場合もある。工業労働者、副業農民、農民からは、それぞれ工業の税、副業の税、農業の税を徴収する。

[共同労働] 現在、共同労働(「集体労働」)は野菜(「蔬菜」)栽培地区におけるグループ(「小組」)。生産隊を単位とするかの蘇州市長青郷の「小組」に相当する)で行われることがあるものの、非常に稀である。

[郷鎮工業の特徴] 郷鎮工業には三つのタイプがある。第一は原料の供給を100%国家に仰ぎ、製品も100%国家に納入するものである。第二は、原料の供給を80%国家に仰ぎ、製品を80%国家に納入し、残りの20%ずつを自己調達・自己販売するものである。第三は原料を100%自分で供給し、製品を100%自分で販売するものである。上海市区の大工場は第一のタイプであり、嘉定県は上海に近くやはり第一のタイプである。江蘇南部のいわゆる「蘇南模式」(江蘇南部型モデル)においては第三のタイプが多い。

十. 婁塘鎮(8月9日)

午後、婁塘鎮を訪問する。嘉定県人民政府のある旧嘉定県城、現嘉定鎮の西北にあるこの鎮までマイクロバスで30分足らずの道のりである。鎮の人民政府の会客室風の部屋で同政府副鎮

長趙賢徳氏、「老齡委員会」委員長で鎮の歴史をよく知る費氏、及び一人の女性幹部の三人と会談する。籐椅子に座り、日本から種子を輸入して栽培されているぶどう——巨峰や西瓜などとれたての果物を御馳走になりながらこれらの方々の熱のこもったお話を聞き、質疑を行った。

まず費氏から鎮の概況と歴史について話があり、続いて、趙賢徳氏や女性幹部も発言し、自由な雰囲気の中に議論を展開した。同鎮は600年を越える歴史がある。従来は婁塘郷といていたが1986年から婁塘鎮となった。人口は26,000人、面積は31平方キロメートルである。16の行政村と2つの居民委員会、及び2つの水産村がある。74の郷鎮企業がある。農業、副業、及び工業の収入が8,066万元。郷鎮企業の労働者は6,000人余り、固定資産が4,000万元。衛生院(病院)には47名の職員、66のベッド。15の学校があり、1つの中学と14の小学校からなる。中学校には126人の教員が、小学校には155人の教員がいる。

鎮の歴史は以下のごとくである。明の洪武年間にここに市ができた。永楽年間(1403-24)に町ができた。その時から婁塘鎮を名乗り、明代、清代、中華民国、人民共和國と4つの時代を経てきた。明代の鎮は、清代には廠となり、その指導者が廠董であった。清代の宣統末年に郷になった。民国以来、郷、区、鎮とさまざまに呼ばれた。国民党政府の統治下では、1つの鎮とその下の10の郷からなっていた。解放の時点で婁塘鎮となり、すぐに婁塘区となった。その後、嘉定県第5区になり、その下に1つの鎮と10の郷が置かれることになった。1957年、区・鎮・郷〔の構成〕はなくなり婁塘郷に一本化された。1958年9月28日、婁塘人民公社が生まれた。1983年5月、政経分離により婁塘郷となり、1986年6月20日、婁塘鎮になった。

ここは上海市区の中心から40キロ、嘉定県の中心から7キロ、清代は江蘇省の太倉州に属していた。面積は32平方キロ、南北14.3キロ、東西が6.5キロである。鎮の市街地は1.2平方キロであり、居民は2,600人、農民は3,366人、流動人口2,700人、合計8,800人位である。市街地の人口は〔婁塘鎮〕全人口の31.3%に相当する。

〔鎮になる時の条件〕上海市には市区の周辺に10の県(「郊県」)があり、各県の下に郷をおくが、人口が25,000人以上で、非農業人口が住民の10%であれば鎮を置く。これは上海市の基準である。最初各県で試験的に鎮を置き、もし基準以上のものがいくつかあれば、その中で基準に関する比率のもっとも高いものを選ぶ。

〔流動人口〕流動人口の戸籍は農民戸籍である。今、鎮では農民が鎮の市街地に来て个体戸になるのを歓迎している。たとえば商人(「个体商販」)となるものは鎮の市街地に移住している。しかしその戸籍はやはり農民戸籍である。

〔鎮の商店〕いま鎮の市街地には125軒の家があるがそのうち40余軒が小売店である。国营、集体、个体の三種がある。520余人がそこで商業に従事している。

〔郷鎮企業について〕紡績、五金、化工、包装、玩具、服装、建築、かばん、スリッパ、上海化織の工場などがある。五金では水道メーターを作っている。化学工業では鍍金をする。包装ではダンボールを作る。玩具では上海対外貿易会社が原料を提供しここでは加工費をとる。服

装も同じで、見本の提供を受けて加工する。その他に建設隊があり400人からなり、その中の橋梁隊は橋を作る。

郷鎮企業は当初は余剰労働力吸収のために設置されたが、現在では利潤を上げることが目的となっている。

行政は郷鎮企業を援助するための措置として、鎮政府の下に農業、工業、副業、貿易（商品売買）の四大公司を置き、またさらに電気供給のための機構、土地利用についての「農建助理」という機関を設け、また環境保全のための機構を設けている。それ以外に個々の部門でも体制を整えている。

もとは、郷鎮企業に対する圧力は非常に大きかった。現在は開放政策の下で状況は変わったが、原料の供給等にはなお困難がある。解決策としては大企業との連合などがある。大企業と連合して大工場を建設する上でも敷地難などの問題はあ

【自由市場】婁塘鎮では早朝のみである。全日のものはない。

【郷鎮の幹部】この婁塘鎮もその他の江南の鎮にも非常に若い幹部が多い。現在の幹部には教養（「文化」）が必要であり、大学を卒業することが必要である。十幾年、実際の仕事に従事した後、大学に入学して数年間勉強する。婁塘鎮副鎮長趙賢徳氏の場合には上海農業院で農業経済管理を学び、党校も卒業し、専門的訓練（「專業培訓」）を受け、馬陸鎮に勤務してからこの婁塘鎮に来ている。趙氏の弟も馬陸で管理工作に従っている。老幹部の教養は必ずしも十分ではない。しかしながら、現在経済の発展は非常に速く、仕事の量も非常に多く、新たな力量が必要とされるに至ったのである。

【鎮の文化財】清代の古い建物はいくつか残っている。民家以外の建物は土地改革のときに没収した。清代の建物は極力その保存に努めている。解放前の会館は残っていない。

【鎮での建築の際の地質調査】嘉定県設計会社が実施する。

座談のあと、午後3時半過ぎの鎮の市街地に出ようと鎮人民政府の建物を改めて見る。5階、4階、3階、2階の独立した真新しい四つの庁舎が正門内に配置されているその一角に、堂々たる扁額を彫りこんだ塑造の門、木製で見事に飾りのある扉、腰板、窓を配置した民国期のものとみなされる美しい建物があった。民国三年（1914）に創始された商務印書館の主人の生家だという。老街に出る。御影石ではなく10センチ四方くらいの大きさの敷石をきちんと置き並べた清潔な道路の周辺に商店街が広がる。道幅は周莊鎮や盛沢鎮の老街に比べてやや広いが町並みの規模は小さい。その一角に集体経営の郷鎮企業の小さな縫製工場があった。約10数台のミシンがあり若い男女の労働者が輸出用のハンカチを縫っていた。老街をまた少し先に進むと「上海市嘉定県婁塘草織工芸廠」があり、人々が製品をダンボールにつめて包装し発送の用意をしていた。当地方特産の黄草（コブナグサ）の加工工場であり、黄色みがかかったクリーム色のこの草を織りなして、シンプルだが見事なデザインのバッグがいま包装されていたのである。あまり見事なので全員が一つずつ土産用に購入した。その隣には上海市の大きな電球工場の分

工場があった。続いて、マイクロバスで市街地を離れ、5分ほど先の化学繊維工場を見学する。それぞれが大きい二棟の作業場からなるこの工場では、白衣白帽の婦人労働者が熱心に作業していた。若い娘さんも年配の奥さんもいた。1人4台を受け持つ化学繊維の織布が行われていた。木製の個人用ロッカーに各人のナンバーと姓名が黄色いペンキで書き付けてある。この工場は先程の電球工場と同様、原料の仕入先も納入先も上海であり、ここではただ加工を担当するだけだという。

宿舍の嘉定賓館に帰り夕食を取る。どの工場の見学よりも雄弁に現在の上海市郊外一帯の企業の発展を物語るのはこの賓館の唯一の食堂での食事時間である。満席みな工場乃至企業の接待に用いられているといってもよい。各テーブルで交わされる会話、笑い声、繰り返される乾杯の音頭は喧騒を極める。一人、ポーランドから派遣されてこの賓館の客となっている技術者が静かに食事をとっていた。

十一．南翔鎮（8月10日）

朝、マイクロバスで東南方、すなわち上海市区の方角へと戻り、20分ほどで南翔鎮に到着。南翔鎮人民政府に入り、ただちに同政府外事辦公室に所属し、自習で日本語も若干解される沈永元氏、年配で歴史に詳しい一幹部、政治協商會議嘉定県委員会副秘書長錢乃之氏、鎮志編輯委員會の青年、以上合計4名の方々と懇談会を開いた。まず、年配の一幹部の方から概況についての説明がなされた。

南翔鎮は上海市区の西部の郊区にあり、その中心から約20キロ位のところにある。1500年の歴史をもつ。南朝の梁の時代に南翔寺というお寺ができ、そこから南翔鎮という名をとった。南翔鎮は郷と鎮とが合併してできた鎮である。鎮には10の居民委員会、19の村民委員会、200以上の工場・企業がある。人口は50,000人、鎮の市街地の人口は18,000人、総面積33平方キロ、市街地は5平方キロである。東西、南北ともに2キロぐらいずつで方形に近い。耕地面積が1,860ヘクタールである。鎮の交通は非常に便利である。上海—南京間の滬寧鉄道が鎮の近くを通っている。滬寧公路も通っている。最近鎮の東側に高速公路を作っており、立体交差を設けている。自然環境もなかなか素晴らしい。明代の庭園古猗園、五代の二つの古い塔がある。

ここ数年間、鎮には経済的發展が見られた。1984年、私たちの鎮では生産額が1億元を越え、「億元郷」になった。昨87年は工業、農業、副業の総生産額が2億2,200萬元を越えた。工業が1億7,400萬元余、農業が2,240萬元余、建設サービス業が1,687萬元余である。経済の発達につれて人々の生活水準も非常に向上した。農村も老人に対しての社会保障も發展した。文化活動、教育活動にも發展があった。

続いて質疑に入る。

[農民1人あたりの請負(承包)面積] [この質問には直接の回答がなく、下記の農家訪問の中

で関連する問答があった。]

[上海から南翔鎮への通勤者] 非常に多い。多くの人々が上海から南翔鎮に来ている。南翔鎮から上海に行くのは少ない。上海の工場がこちらに引っ越してきていて、送迎バスで通勤者を運んでくる。上海市区や崑山県が工場をこちらに建てるようになったのは1958年、社会主義改造が完成したあとからである。

[郷鎮企業] 電球、自転車、通信用の電線、化学工業、電動機などの業種がある。その他に上海の工場の進出があり、工作機械、家電製品、薬品、民間用電線にわたる。

郷鎮企業には、一つは上海の大工場と関係があるもの、いま一つは嘉定県の工場と関係のあるものという二つの場合がある。

[高速道路の影響] 高速道路は上海から嘉定県嘉定鎮までである。経済発展に与える影響は大きい。高速道路の近くに新しく工業発展区を作る計画がある。その規模は450畝である。高速道路とその他の道路の〔連絡の〕の整備も行っている。外国の企業の誘致もしている。現在も日本、フランスの投資による企業がある。

工業発展区には将来化学工業以外は何でも誘致したいと思う。

[労働者数] 郷鎮企業を含まない労働者は10,000人、郷鎮企業は11,000人である。

[上海市の都市計画の中での南翔鎮の位置] 一つは上海の工場の郊外進出の対象地であり、いま一つは観光である。ただ、ここは、上海市の重要な工業地帯としてでなく、人民の居住地区として位置づけられている。南翔鎮の市街区の人口を5万人まで増やそうという計画がある。上海市のための住宅の建設によってではなく、南翔鎮の労働者のための住宅の建設によってである。

ここでいったん質疑を中止し、私たちの希望を聞いて鎮政府が立案したスケジュールに従って参観に入る。鎮内に居住する一農家の訪問はその一つであった。二人の息子のために長屋式で二階建の大きな家を建て、内部を二軒に分ち、兄と弟をそれぞれの家族と住わせ、その家に同居している67歳の老婦人がこの農家を代表して私たちと話してくれた。蘇州市長青鎮の花農王柏平氏の二階建二棟続きの家と比べて内部にほとんど家具がなくがらんとした感じである。兄さんの家では、二階にあった日本製のカラーテレビ、弟さんの家では、階下の一部屋に竿をかけ、ハンガーを使ってきちんと干してあった十数着の衣類と小屋の中の12のおりに飼ってあった白兔が印象に残る。この老婦人にいつ頃分家をしたかと聞くと、1978年であり、その時から老夫婦は下の息子(弟の方)の家に住むようになった、と答えられた。さらにその当時御主人は在世されていたかと尋ねると今は亡き御主人のことを想起し、多弁になられた。この家の基礎ができたときには御主人はまだ生存されていたという。この家を建てるに際し、御主人が材料を調達するためにずいぶん苦労したが、そのために死期を早め、1984年・85年におけるそれぞれの新しい家の完成を見ずに亡くなられたのであった。老婦人は涙ぐみながら話された。1978年の分家を起点にこの新築計画がスタートしたものであろう。興味深かったのは、建築材

料の話になったとき、価格の上昇に触れ、磚（れんが）1個が以前は2.6分だったのに、今は8分にもなったと話されたことである。

私たちは、このときあわせて隣の棟の若夫婦の家も見せていただいた。二人して昼食を作っているほほえましい風景に出会ったのであるが、この家の前には、自留地ではない大きな敷地に花園があり、咲き乱れた花ばなの美しさとともにその存在自体に驚かされた。老婦人ともその息子たちの世代とも異なる最新の世代の生活スタイルとそれを可能にした時代を見る想いがあった。

この老婦人から生産責任制（「承包制」）下の耕地について聞くことができた。兄と弟との二世帯からなるこの家は労働力2人分の兄の家が3畝、1人分の弟の家が2.7畝の請負地（承包地）を割り当てられている。その他に各家族員1人につき10分の1畝の自留地をもっている。請負地ではすべて米を作っている。1畝から700斤の米が収穫できる。兄弟でも二つの家それぞれが別々に耕作している。これ以上の耕地の拡大は望んでいない。なぜなら時間がないからだ。息子たち夫婦はそれぞれ工場へ行っている。兄は化学肥料工場へ、弟は養魚場へ、また兄の嫁はプラスチック工場へ、弟の嫁は自動車工場へ通勤している。兄には2人の子供が、弟には1人の子供がいる。

自由市場（「農貿市場」）との関わりは少ない。自留地で作った野菜は自分で食べる。近所の人でも行く人は少ない。

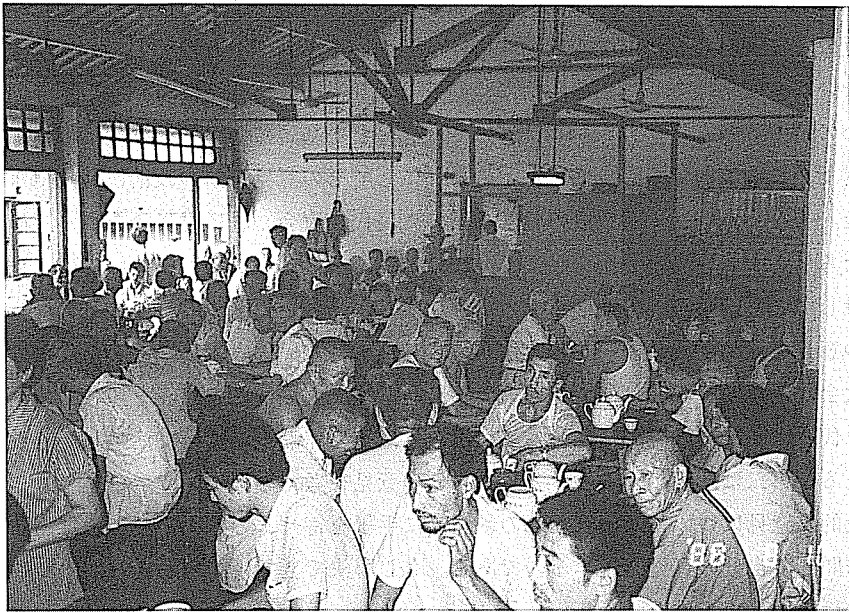
農業以外の給料による1年の収入はどちらの家とも3,600元である。農業収入はみな食費に費消する。

ここでは仏教信者はいない。キリスト教信者がいる。〔随行してきた鎮政府の人たちによれば南翔鎮には60余人のキリスト教信者がおり、嘉定鎮まで礼拝に行っている。〕

昼食は南翔鎮の東南端にあるかの名園、すなわち16世紀、明の嘉靖年間に作られ、18世紀、清の乾隆年間に拡充された古猗園を訪問する。南翔鎮を幾度となく通過するたびにこの古猗園の外壁だけを見、またすぐ田園地帯に目を奪われ、いつも南翔鎮ははずこにといぶかしく思っていた。しかしそのわけがようやくのみこめた。上海北区駅からバスに乗り真如鎮を経、真南路でこの外壁の南を通り、鎮の市街地の南側を西進し、まもなく北へ折れて市街地の西側を北進し、嘉定鎮へ向かうというルートをとっていたからであった。南翔鎮の市街地を完全に迂回していたのである。昼食に出た名物の小籠包子、唐代の二つの経幢、日本の東北侵略に抵抗してデザインされた缺角亭など、筆者にとってはほとんどすべてが1983年の初訪問を想起させるものばかりであった。しかし、何よりもこの緑豊かな名園にポート遊びに来ていた近在の農村の青年たち7人のグループの屈託のない笑顔が、83年にはなかったものとして印象に残った。その笑顔が先程訪問した若夫婦のものでもあったからである。

食事のあと、昼下がりの南翔鎮老街を歩く。呉県の甬直鎮、崑山県の周莊鎮、呉江県の同里鎮、黎里鎮、太倉県の沙溪鎮、桐郷県の烏鎮鎮、余杭県の唐棲鎮（塘栖鎮）のような古鎮らし

い老街がそっくり残っているわけではない。もっとも古い橋である太平橋も、本来は明代のものながら、橋のたもとの碑文によれば中華民国21年（1932）の重建になる。しかしながら、かの泉州開元寺の石造の双塔をそのままミニチュアにしたような、五代から北宋にかけての南翔寺の双塔をその中心部分にもつこの老街にはやはり風格があった。もっとも私たちを驚かせたのはこの鎮の茶館である。小さな体育館のようなその大きさ、すべてシャツかランニング姿の中年男性約100人というその客の多さ、そして飛びかう話し声によるその喧騒。筆者の所見では、いずれも江南デルタ第一である。一人あて急須一つの茶によって織りなされるこのコミュニケーションの世界こそ中国の老百姓のものであり、かつ南翔鎮のもつ巨大な生産と生活のエネルギーの反映である。



南翔鎮、昼下りの茶館

午後、再び鎮政府の呼びと及び嘉定県政治協商会議の銭乃之氏と懇談会をもった。
[郷鎮企業の問題点] 一つは資金不足である。その対策としては外資がある。例えば南翔鎮の二つの電球製造工場は外資を導入している。南翔鎮の側でも投資環境を整備し、投資する側の利益が上がるようにしている。つまり「互利」をはかっている。

一般に郷鎮企業の資金は、最初は鎮政府が出し、さらに拡大するときには企業の自己資金のほか、銀行から借りる。現在7,000万元になっており、日本・西独・フランスの技術を導入している。

郷鎮企業が外資を導入して合作する場合には、その外国を訪問する。たとえば、電線工場の者が日本・カナダなどへ行っている。

外国にとっては、78年以来の中国の開放政策がいつまで続くかという点が問題であり、継続性が保証されれば外国が技術の中国への移出をためらうことはなくなるだろう。ただ、過去に「十年の動乱」としての文化大革命があったため、外国が投資や技術移出に慎重になるのは理解できる。

中国の郷鎮企業が日本の中小企業から学ぶ点は、中国が日本とは体制が異なることから、技術が中心になるであろう。

[栽培する作物についての農民の選択権] 野菜にしる水稻にしる自分で選択できる。彼らが毎年国家に「農業税」を提供するとき、以前は米や綿花で納入していたが、現在は現金で納入する。この現金で国家は糧食を買い付けることができる。

ちなみに現在嘉定県の封浜、江橋、黄渡など合計5つの郷が上海市区に野菜を供給している。
[鎮の行政と住民の意思] 中国の政治機構は全国レベル・省レベルについても理解することは容易でないが、従来地方レベルの政治についてはより不明確なことが多かった。今回私たちはいくつかの鎮で、つまり地方レベルにおいてももっとも基層に属する鎮の政治機構について質問を行った。この南翔鎮でも、住民がどのようにしてその意見を鎮の政治に反映できるのかを質問した。また、あわせて鎮政府の幹部は鎮の人民代表大会や居民委員会を高く評価するが、知識人たちは必ずしも高い評価を与えていないことを指摘し、この点についての意見を求めた。これに対してまず鎮政府の幹部から次のような回答があった

人民の意見を反映するには多くの方法がある。第一は人民代表大会であり、代表の選挙をともなう大会が三年に一回、毎年定期大会が二回あり、人民はこの代表を通じて意見を反映できるし、代表は基層（「下部」）に行って状況を見、その状況をふまえて活動し、鎮長にもその事を伝える。第二は、手紙である。人民は自分の意見や考え方について手紙を書くことができる。一般的な意見についてはわれわれの執務室に手紙を寄せるのもよい。第三は、訪問である。政府を訪問して自分の意見を述べるのである。もし解決できない問題があれば、われわれはそこに出掛けて行って工作をする。

同じ問題について嘉定県政治協商会議の銭乃之氏は次のように補足された。一つの手立ては人民代表大会であり、これは法律制度である。いま一つの手立ては平常時の場合であり、これは民主制度である。意見を提出したとしても、政府との間に意見の分岐が存在することもある。政治協商会議には共産党以外の個々の民主党派はみな参加している。鎮の人民が政治協商会議に手紙を書いたり、訪問したりして自分に意見を伝え、それを政治協商会議から政府に伝えることもある。

居民委員会については、次のような指摘があった。

居民委員会は過去の保甲制度のように専ら政府の意向を実施させる組織ではない。居民委員会は自治組織であり、住民（居民）が自から運営する。だから税の徴収とは無関係である。厚生・福祉・衛生のことは行う。住民の意見は居民委員会に反映される。居民委員会の責任者は

二年に一回の住民の大会で選ばれる。村民委員会もある。居民委員会・村民委員会は非常に多くの仕事をしている。これらの組織がなければとてもやっていけない。

続いて私たちは南翔鎮の歴史について新南翔鎮志編纂計画に関するものを皮切りにいくつかの質問をし、次のような回答を得た。新鎮志編纂を除き、主として錢乃之氏が話された。

[新南翔鎮志の編纂] 鎮志編輯委員会辦公室が活動しており、1983年に、市街地の部分についての記述はすでに大体できあがっていた。鎮と郷の合併が行われたため、編輯の対象も拡大し、郷の部分が87年にできた。88年末に約40万字からなる初稿が完成する予定である。なお辦公室には「專業辦公室」と「業余辦公室」とが置かれている。89年には正式に統一書号を付して公開出版されることになろう。経費は南翔鎮人民政府が負担する。

[南翔鎮の歴史の特徴] 南翔鎮は梁代に仏教の廟(寺院)から出発した。南翔鎮が形成された頃は嘉定県城よりも大きかった。嘉定県城は海上交通の便がよく、土地改革戦争以後には、宝山区とともに発展する。南翔鎮は、歴史的に陸上交通が非常に便利であり、綿花を栽培する綿花地域であり、綿布——土布生産が特に発達し、それに対応して商業も大変発展した。嘉定県の中で南翔鎮は大きな規模をもつ。県内にはこうした鎮とより規模の小さい市とがあった。商業の発展以外に当地からは文人、官僚や、画家のような芸術家も輩出している。その後事情が変わった。それまでは綿布が主流であったが、米の栽培が主となったのである。これは近代における上海の発展の中で、上海の需要が増大したことによるものである。一軒の米商人のところに1日600人もの人が取引きに来るような状態が現出した。茶館もそれにつれて増加した。三つの紗廠(綿紡績工場)、二つの面粉廠(製粉工場)ができた。第二次抗日戦争(1937-1945)当時のことである。南翔鎮は交通の要衝であり、当時まだ公路は完備されていなかったが、太倉、嘉定県城、婁塘から上海に行くには必ず我々の南翔鎮を通過しなければならなかったのである。南翔鎮は5度の戦争を経た。太平天国、小刀会、民国初期の軍閥戦争、二度の抗日戦争である。しかしどの戦争も南翔鎮を破壊することはできなかった。交通と商業という基盤があったからである。現在旧嘉定県城、すなわち嘉定鎮は科学技術方面に重点を置くようになり、郷鎮企業の面では南翔鎮が馬陸鎮に次いで第二位を占めている。

ところで、江蘇省呉江県のいくつかの大きな鎮は1956年の社会主義改造の頃から衰亡し、1970年代の末期からふたたび発展した。費孝通によればその原因は商品経済と郷鎮企業の発展如何によるという⁽⁶⁾。しかしながら、南翔鎮についてはこうした衰亡と復活がないように見える。この点をどう理解すべきか、という問いを私たちは提出した。それに対して錢乃之氏は次のように答えた。

呉江県とは共通点もあるが、違う点もある。たしかに、50年代には紡績工場は閉鎖され、120軒あった糧食店も閉鎖された。しかし、商人は工業経営者となった。すなわち米行(米商人)花行(綿花商人)は工業経営に変わった。従って商業は減少したが、工場はなお多く、労働者も少なくなかった。この点が異なっている。なお今日の工場についていえば、郷鎮企業が大大

的に発展したことが重要である。ただ、郷鎮企業は、鎮経営のものよりも、村経営のものがむしろ規模も大きく発展もめざましい。

民国19年(1930)刊『嘉定県統志』には南翔鎮に400余軒の商店があったと記されている。解放後の公私合営化の時期にそれが200余軒になった。現在、南翔鎮の商店は108軒である。しかし見逃してはならないのは商店の規模が大きくなっていることである。理髪店も茶館もみなそうである。

商店について補足すれば、解放以後にも「染行」(綿布を染める商店)が1軒あった。「布行」(綿布小売商)はなかった。抗日戦争の初期には、3軒の「布莊」(綿布問屋。農民から綿布を買上げる)があった。抗日戦争の時期には130軒あった「米行」が40軒になった。

〔町並み保存と環境問題〕古い市街地——老街を保存する計画はある。新しい建物は建てさせない。工業の発展による環境の汚染を防ぐために条例があり、汚染について訴えがあれば改善命令を出し、従わなければ、操業を停止させる。また、住宅地区、商業地区、工業地区などの土地利用規制も行っている。

十二. 黄渡郷 附嘉定聯合棉紡績廠等 (8月11日)

早朝に起床し、8時前に宿舎を出る。まず嘉定鎮のタオル製造工場を見学する。仕事にかかる前の女子労働者に聞くと、1ヶ月の給料は70-80元、年間で〔獎金を合わせて〕1300元ほどだとのことであった。タオル地の洗濯、乾燥、整理、型を使う多色のプリント染めに至る全工程を参観することができた。続いて嘉定鎮から黄渡鎮への公路(嘉黄路)沿いにある上海嘉定聯合棉紡績廠を訪問した。廠長の鍾展和氏は比較的若い「工程師」で私たちの質問に活発に答えて下さったほか、工場の案内も熱意に満ちたものであった。同氏によれば、この工場は、嘉定棉紡廠、嘉定県工業局公営公司及びいま一箇所の合計三つの単位が連合して結成した工場である。この工場ではガーゼが作られていた。やや横に長い矩形の広大なメイン作業場(「主車間」)には大型の作業機が整然と、しかしびっしりと配置され、白衣白帽の女子労働者と白衣無帽の男子労働者が緊張の面もちで受け持ちの機械を見張っている。天井には隙間なく蛍光灯が据付られ、場内は明るく清潔である。1983年に筆者が一人復旦大学のお世話で嘉定県の嘉西人民公社を訪問したとき、すでにこの綿紡績工場をも見学したが、当時はこの作業場だけであったように記憶する。工場長の説明にある「聯合」がこの間に実現したものであろう。ところで、私たちの共通の印象では江蘇省の諸鎮から上海に近づくにつれて、工場の労務管理、品質管理が丁寧に行われるようになり、のんびりしたムードがなくなってくる。ふと、「第四期計画生育動態表」という計画出産の進行状況の統計が壁面に大きく掲げられていることに気付く。人口抑制政策の推進を示すものであるが、性に関わる問題への行政の強力な介入と性に関する中国独自のきわめて乾いた表現が改めて印象に残った。たとえば「已落實措施数」として「避妊薬

(口服・注射), 放環, 女扎, 男扎, 外用薬服, 避妊工具, 其它」の欄が, 「無生育能力婦女数」として, 「絶経, 不育, 喪偶, 離婚」の欄があり, それぞれの数値が記入されている。

見学を終え, 成長期の水稻の緑の中に自留地のトウモロコシやさつまいもが目につく田園を突き切って10時20分黄渡鎮に到着した。正確には人民政府庁舎正門の左右に掲げられた「嘉定県黄渡郷人民政府」「中国共産党嘉定県黄渡郷委員会」の二大看板の示すように黄渡郷である。女性の副郷長楊秀英氏, 助理の顧銀生氏, 人民政府辦公室主任の徐学長氏が待ち構えておられた。会客室に入り, まず副鎮長楊氏からこの黄渡郷の概要の説明があった。ただ, その内容は午後の懇談の冒頭に突如放映されて私たちを驚かせたこの郷の紹介ビデオのそれとほぼ重なっていた。要点は以下のようなものである。このビデオはバックミュージックと標準語のナレーションつきである。

黄渡郷は上海市の西部にあり, 嘉定県の西南部にあたる。面積は29.45平方キロ, 東西が10.4キロ, 南北が5.7キロである。北には滬寧鉄道が通り, 中心で曹安公路と嘉黄公路がここで交差している。主要な河川が7つある。郷の全人口は28,000 (28,781) 人, 戸数は約7,000戸, 労働力は15,358人である。() 内は楊氏の説明による数値である。

黄渡鎮は古い歴史をもつが郷の南方に偏している。市街地の形はT字形で, 大小11本の道路があり, 東西1,528メートル, 南北1,055メートル, 面積は0.59平方キロである。市街地である鎮には, 1つの居民委員会があり, 住民(「居民」)は4,000 (3,839) 人である。商業, 財貿(財政と国内外の商取引), 銀行, 税務, 工業, 郵便, 電報, 水電(水道と電気), 交通, 管理機構などの部門が置かれている。高校・中学校(「中学」), 小学校, 幼稚園, 病院があり, 文化施設として文化館, 映画館がある。

市街地以外の地域には18の〔行政〕村があり, 160の〔自然村の〕村民小組がある。野菜・穀物を主とする耕地面積は2,100ヘクタールである。野菜が中心で毎年上海市民に120万担を供給している。糧食の生産は2,300万斤である。

郷・村で経営している企業が40あまりある。副業生産には, 養豚, 養鶏, 養鴨, 乳牛, マッシュルーム, しいたげがある。

1987年度の黄渡郷の農業, 副業, 工業の総生産高は1億1,441万元, そのうち農業が929万9千元, 副業が1,367万1千元, 工業が8,499万8千元である。

この概要は1988年春の予備調査時を含め, 江南デルタの各鎮でうかがった中では, 比較的簡潔な部類に属するが, 内容はよく整理された, 周到なものであり, 独特の合理性に貫かれていた。この合理性は, 概要が話されたあと, あらかじめ質問を出させて見学に移り, 見学・昼食のあと, 先述のビデオを見せ, 続いて質問への回答と討論に入るといふ進め方にも見られた。

中心部分4階, 他は3階からなる人民政府の庁舎を出て市街地を見る。正門の前に非常に大きな起重機工場があり, 驚く。この広い道から敷石で舗装した狭い道に進み, 老街に出る。昼前の商店街には人通りも少ない。「黄渡供銷合作社 生産資料門市部」には化学肥料不足を補

うため特定品目を顧客との協議価格（「議価」）で販売する旨のはり紙がある。この同じ合作社の「雑貨中心門市部」,「黄渡蔬菜果品商店 地貨行」などを含め、在来からのタイプの集体及び国营の商店が目につく中、黒地に金文字で「徳和館」という看板のあるござっぱりした食堂があり、若い女子の店員がにこやかに入口のところに出てきた。案内の楊副鎮長にうかがうと个体戸の店だという。とある古い民家の入口に数枚の看板がかかっている。その一つに「上海市嘉定県个体労働者協会黄渡分会」のものがあつた。黄渡鎮の市街地地区唯一の居民委員会、「嘉定県黄渡郷黄渡鎮居民委員会」もここに事務所をおいている。はずれまで進み、政府庁舎前的一本東の広い道を戻る。「黄渡影劇院」の大きい建物を過ぎ、テラスの化粧タイルの美しい「黄渡中学」の前を通りかかる。楊副鎮長のお話しでは、中学（日本の中学・高校）を出ると高校（日本の大学）に進むものが30-40%いる。しかし、この中学への進学率自体はそれほど高くはない。中学では女子に比重が高く、高校では男子の比重が少し高い。小学校への入学率は100%だが、卒業率は90%である。

昼食では野菜の名産地らしく冬瓜、黄瓜（キュウリ）をはじめとする野菜が新鮮で美味しい。楊副鎮長にキャリアーをお尋ねする。現在40代の半ば、1950年代の後半には婦女連合会の副主任をつとめ、1972年に人民公社に入り、管理委員会の副主任をつとめ、最近現職についたという。すらりとした姿に明敏さがただよう。午後は私たちの提出しておいた質問に対し以下の回答があつた。

〔黄渡鎮の歴史〕二千余年の歴史をもつ古い鎮である。鎮が形成されたのは東晋の時代である。当時呉淞江地域には漁村があつた。また唐代から青龍鎮があつたが、北宋の時期に土砂で呉淞江が埋まり次第に衰えた。呉淞江には長江を通じて海水が流入して来るがその潮位が上がると船の通行が可能になり、青龍鎮の繁栄はそれに依拠していたのである。黄渡鎮の名の由来もこの川と関係がある。春秋戦国時代に楚の黄という将軍に率いられた軍隊が攻めて来て川を渡つた。それにちなんでこの場所が黄氏渡と呼ばれ、のちに黄渡となつたのである。

1860-63年、太平天国の時期、黄渡鎮は戦争によって破壊され、それまでもう少し北側にあつた市街地がこの場所に移つた。当時は市が朝、昼、晩と3回も立って大変にぎやかであつた。東西の市を大黃渡といい、南北の市を小黃渡といつた。また、補修のためにこの地に来て停泊する船も多かつた。

〔商業の歴史と現状〕解放前の黄渡鎮には253軒の商店があつた。当時の商店はみな「前店後家」（前が店で奥が住宅）式のものであり非常に小さいものをも含んでいた。1954年4月30日の私営商業の改造前には388軒の商店があり、業種は38に涉つていた。綿布、白布、南北雑貨、魚屋、土地の物産（「地貨」）、茶館、旅館、理髪店、写真屋、飯店、点心店等等である。

1984年には128軒の商店、774人の従業員を数える。1978年の中国共産党の三中全会以来、商品流通を促進するためのさまざまなルートを設けることとしたため、商業が復興してきたのである。1985年の総取引高は2,310万2千元に達した。うち、集体商業（共同経営）が1,716万4

千円で75.16%、個人経営が11万7千円で0.51%、店舗のない「个体小販」が8万2千円で0.3%、「集市貿易」（自由市場）が247万2千円で10.7%、その他の運送、修理等の商業が326万7千円で14.14%である。

〔手工業及び工業〕解放前には時計の修理、印刷、木器、鉄器など全部で117軒の手工業があった。解放以後、初歩的改造があり、生産合作社とか生産合作組が結成された。1958年、人民公社が成立すると、郷村企業が郷・村によって経営されるようになり、現在では40あまりになっている。業種は大きくは三つに分かれる。機械、建設（橋梁、建築等）、服装である。今、全郷で12,000余りの労働力があるが、そのうち8,700余りが郷村企業にたずさわっているのである。

郷で経営している最大の企業は起重機工場であり、労働者が300人、面積10,000平方メートル以上、売上げが1,000万元、そのうちの利潤が300万元である。いま一つ大きいのは、針織廠（メリヤス工場）であり、労働者300人、売上げが1,000万元、利潤が200万元である。

その他に上海の大工場との共同経営（「聯営」）の企業が10ある。印刷、計算器、録音機、コピー機、服装、鉄鋼などの業種に涉っている。

〔个体戸について〕商工業の个体戸は243戸ある。これは長期のものであるが、他に臨時の短期ものが47戸、その他に外来のものがあり、今日自由市場でみたのは安徽から来た个体戸である。業種は建設、修理、運輸、裁縫、飲食店、各種副食品、雑貨、果物などである。

〔村の商店〕商店は鎮の市街地だけでなく、各村にも「代售（銷）店」があり、生活用品と生産に必要なものを販売している。

〔農業〕1987年の糧食（穀物）生産量は1,775万斤、そのうち国家に納入した負担部分は660万トンであった。野菜にはいろいろな種類がある。じゃがいも、トマト、なす、とうがらし（「辣椒」）、冬瓜、キュウリ、なっば（「小青菜」）などである。野菜は黄渡がいちばんよいといわれている。

〔黄渡郷一帯の地質上の特徴〕この一帯は長江の土砂が推積して出来たところであり、土質は肥沃である。黄泥ほか合計7種類に分けられ、さらに細かく分ければ13の差異がある。専門家ではなく十分には分からないので、専門の著作で調べてほしい。

〔郷人民政府と共産党との関係〕1958年に成立した人民公社が1983年に解消し、郷人民政府が出発した。以来、郷人民政府は、農業、副業、工業、貿易（商業）公司を設置し、農業、副業、工業、商業の連携を強化し、郷の発展を目指してきた。その中で、郷政府は行政を担当し、郷の党委員会が思想工作を担当し、それぞれの面で国家との結合を図っている。郷政府と郷の党委員会との関係は、具体的には表現しにくい、いわば「分工不分家」（分担すれども分離せず）、不即不離の関係とでもいうしかない。

〔現在の黄渡郷の最重要課題〕現在、経済が国家の中心課題であり、経済を発展させることが黄渡鎮にとっても最大の課題である。目下農業、工業、副業の総生産高が1億元を越えたばかりであるが、近くには2億元を越えたところがある。馬陸鎮、封浜郷などである。これらの地

区は、(1)原来、産業の基礎が必ずしもなく、(2)上海には非常に近く、(3)農業よりも他の分野に活路を見出そうとしているなどの諸点で、南翔鎮、婁塘鎮、わが黄渡郷とは異なる。黄渡郷では、農業、副業、工業の三分野の均衡を保ちつつ経済の発展を図りたい。(1)糧食は基礎、(2)野菜では国家の割当てに答え、(3)工業を発展させるという発想ももっている。

むすびに代えて

以上は1988年夏の江南デルタにおける私どもの調査活動の中から、8つの鎮(建制鎮)・2つの郷、すなわちあわせて10箇所の小城鎮とほか2箇所の単位の訪問・参観を記録したものである。もし、個別的な小城鎮を対象とし、そこでの特定の地域・単位を選び、特定の課題について本格的な調査を実施するとすれば、これらの訪問・参観の多くは、いずれもその初日乃至冒頭の時期における概観把握のための準備作業の範疇に属するであろう。しかしながら、この記録は次のいくつかの点において一定の意味ももっている。

第1に、鎮・郷の人民政府と嘉定県人民政府の幹部が口頭で提供し、私たちがメモとテープに記録した鎮・郷に関する統計的なデータは、それらが出版物や複写の形で公開されることがまだ少ないだけに、それ自体が鎮・郷の現状を明らかにする貴重な基礎資料である。

第2に、上記の幹部、文化行政の担当者、郷鎮志の編纂従事者や文化施設の責任者によって語られた各鎮・郷の歴史、とくに民国期を中心とする解放以前のそれと解放以後、80年代の開放政策実施期にいたる比較的新しい時代の歴史に関する説明は、量的に多いとはいえないが、新たな郷鎮志の公刊がなお進んでいない中ではやはり貴重なものである。

第3に、いわゆる郷鎮企業の経営者や個別農家へのインタビューは、今回の参観・訪問の性格から、ごく少数でしかも2時間前後のものに限られたが、前者についての本稿に叙述しなかった部分を含め、現状の認識に資する情報と今後の本格的調査における課題設定への手掛りとなり得る。

第4に、ここに敢えて拙ない文章によって綴った各小城鎮の景観のもつ意義である。江南デルタの小城鎮は、開放政策が本格化した1983・84年に筆者の観察したところと比べ、道路・建築の改造・新設にともない、かなりのスピードでその景観を変えつつあるが、なお、明清以来民国期までに形成されたその外貌を保持している。こうした景観自体が現状と歴史の理解への情報を豊富に提供している。

本稿で叙述したこのような意味を担う記録から、私たちは設定した研究課題に沿ってどのような具体的認識を獲得し得るであろうか。この点は本稿の任務の範囲を越えているが、筆者の分担課題を中心に思いついた点を若干挙げておきたい。

私たちの提出した「現在のあなたがたの郷の最重要課題は何か」という質問に対して、上海市黄渡郷人民政府の幹部は「経済を発展させること」であると回答されたが、この回答は現在

の江南デルタ小城鎮行政当局の基本的見解であろう。これは日本の中国研究においてもいまや常識となっているといつてよい。そしていわゆる郷鎮企業がかかる経済発展の中核に据えられていることも、各郷鎮でのインタビューや観察で明らかになったところである。これも日本の中国研究においていまや常識となっている。しかしながら、郷鎮企業の存在形態、その地域社会における役割、それが直面している克服すべき課題について、私たちの具体的認識にはなお乏しいものがある。本記録にはこの乏しさを補う手掛かりがいくつか認められる。たとえば、郷鎮企業の発展を図る志向が過去において上部から大きな圧力を受けていたこと、現在も敷地、資金、原料などの面で少なからぬ困難に直面していることなど、その克服すべき課題の一端が明らかになった。多様をきわめる郷鎮企業の存在形態についても、下記の農家経営の分野を中心とするその地域社会への影響についても、はじめて知り得た点がある。

郷鎮企業の展開を基軸とする経済の変動の下での農業生産責任制による農家経営の存在形態と課題についても、改めて知り得た事実が非常に多かった。土地の管理、耕地の労働力当たりの分配、自留地の分配、専業農民・副業農民・兼業農民(=工業労働者)の区別、これらの農民への租税賦課のありかたと金納を含むその形態、生産物規制、耕地の賃貸借や売買、家族と労働との関係をはじめとするそれである。

中国の政治の基層をなす郷・鎮行政についても多くの考察の素材が得られた。すなわち建制鎮であるか否かを問わず、小城鎮の市街地部分に置かれた居民委員会、農村部の行政村におかれた村民委員会、自然村におかれた村民小組といった基層組織の存在とその機能、住民の意思を行政に反映する上で想定されている郷・鎮の人民代表大会の役割や郷・鎮人民政府の独特の世論吸収手段などについて、重要な情報や把握への貴重な示唆が獲得されたのである。

筆者のように明清以来の中国社会の変化の特質と方向の把握につとめているものにとって、非常に深い印象を受けたのは、上述のように、変容を遂げながらもなお明清・民国以来の市鎮の規模と風貌を残しているとみなされる小城鎮の町並みと建築そのものである。私たちが選択したのがいずれも明清以来の歴史をもつ古鎮・名鎮であり、その多くが清末までに出た郷鎮志を持つということとこうした町並み・建築のありかたとはもとより無縁ではない。しかしながら、88年の春の予備調査で参観した浙江省の唐棲、烏鎮、南潯、89年秋の予備折衝の途次に参観した上海市の朱家角、羅店の両鎮、江蘇省の沙溪の諸鎮を含め、これらの鎮では、老街がなおきちんと残り、かつ充実した市街地が新しく建設されつつある。そこには文化財としての価値やその保存問題にとどまらぬところの江南デルタの歴史と現状の特質に関わる問題が内在している。老街の中に依然として存在している茶館、書場など伝統的な施設の存在にも同じ問題が潜んでいる。

紙副はつとに尽きており、ここで今回の調査を総括する前提としてのこの記録の筆を置く。

注

(1) 地理学の3人は1989年6月15日の名古屋地理学会でそれぞれの関心に即した報告を行った。海津正倫「中国江南デルタの地形環境」、林上「中国・蘇州地域における集落システムの構造と産業の発展」、石原潤「蘇州市およびその周辺における『自由市場』」である。歴史学の1人稲田清一は、調査旅行の観察に示唆を得て論文「清末、一郷居地主にとっての地域社会——その空間的範囲——」を書き、『史学雑誌』の99編2号(1990年2月)に掲載された。また歴史学の一人の筆者は研究の基本資料である号鎮志について『江南デルタ号鎮志目録稿』を88年に作成し補訂し、補訂中である。南京大学側は、羅崙が江南デルタの市鎮の発生・発展の原因、故洪煥椿氏の代理范金民が蘇州府における市鎮の特質、張華が明代太湖周辺の專業化市鎮発展の条件、協力者夏維中が市鎮の発展と運河との関係について研究をほぼ完成し、宋家泰と代理庄林徳の地理学分野の研究とあわせて、90年3月をめどに『南京大学学报』に発表する予定である。

1989年度、すなわち第2年目の調査は、当初1989年7月1日から30日まで実施の予定であったが、種々の曲折と検討を経たのち、1989年11月1日から16日にかけて、上海市青浦県朱家角鎮と同市宝山区羅店鎮を対象として実施された。なお、1989年5月25日から同31日まで、森が準備のため、自費で南京大学と調査予定地である上海市を訪問した。また同年9月30日から10月12日まで、森が共同研究会の開催のため南京大学を訪問するとともに、上海市の上記二箇所の調査予定地で準備を行い、復旦大学歴史系と同歴史地理研究所にお邪魔して協力方を依頼した。この第2年目の調査については、別に名古屋大学側の研究者による報告書の出版を予定している。

(2) 紙副の関係から詳細については割愛した。

(3) 最近、広東省では広州市等についてこの種の地名録が公刊されつつある。たとえば、広州市地名委員会『広州市地名志』編纂委員会編『広州市地名志』(香港大道文化有限公司、1989年6月)などである。

(4) 1989年10月3日に訪問した上海市羅店鎮の旧知の農家X氏宅では、近年、夫が都市戸口に変り、妻と二人の子はなお農村戸口に留っている。このように一家で戸籍を異する場合もある。

(5) 鈴木智夫『近代中国の地主制——「租覈」の研究・訳注——』(汲古書院 1977年)

(6) 著名な論文「小城鎮 大問題」で広く知られるようになった費孝通の見解については本稿四、蘇州大学の項を参照されたい。本稿の上記の項で紹介した『小城鎮建設探討』をはじめ、当該論文にはいくつかのテキストがあるが、新華出版社から1985年6月に出された同氏著『小城鎮四記』所収のテキストと、この書物のすぐれた翻訳としての『江南農村の工業化“小城鎮”建設の記録 1983～84』(大里浩秋・並木頼寿訳 1988年研文出版)が有用である。

なお、鶴見和子を代表とし、ほか6名の現代中国研究者の参加した日本のプロジェクトチームは、総合開発研究機構(NIRA)の委託により、1985年から87年にかけて、先に触れた中国の江蘇省小城鎮研究会とともに、江蘇省南部の小城鎮の現地調査及び共同研究を実施した。その詳細が、最近、『中国における「小城鎮」建設に関する研究——江蘇省を中心として——』(総合研究開発機構。平成元年8月)として刊行された。